

---

# バカと奇人と召喚獣

雷鳥

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカと奇人と召喚獣

### 【NZコード】

N1978S

### 【作者名】

雷鳥

### 【あらすじ】

世界で唯一の「試験召喚システム」を取り入れた『文月学園』に通う有明洋太郎は、振り分け試験をまさかの理由で休み、見事（？）に2・Fに進級し（てしまつ）た。彼はまた、たった2人しかいない「試験戦争研究会」の一員だった。  
さてそんな奇人（変人とも）と言つてしかるべき彼は、如何様に頑張るのでしょうか。

## 序章（前書き）

### （バカテススト～化学）

問題：調理の為に火にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。このときの問題とマグネシウムの代わりに用いるべき合金の例を1つあげなさい

### 姫路瑞希の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると、激しく酸素と反応するため危険であるという点。』

### 合金の例……ジュラルミン』

### 教師のコメント

正解です。合金なので鉄ではダメと言つひつかけ問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

### 天王洲さくらの答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸化する点。』

### 合金の例……真鍮』

### 先生のコメント

これも正解です。真鍮は黄銅とも呼ばれ銅と亜鉛の合金です。

### 有明洋太郎の答え

『問題点：軽いというだけでマグネシウムを鍋の材料に選択してしまった愚かさ。もし、マグネシウムが鍋に向いていたら重たい鉄鍋や土鍋は流通しにくいはずだ。しかしながらそれは世間一般に出回らなかつたのか、それになんらかの無視できないデメリットがあるからだと考察できなかつた無能さ』

### 合金の例……ステンレススチール』

先生のコメント  
そのデメリットを答えてくれれば結構です。合金については正解  
です。

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払つてなかつたこと』  
教師のコメント  
そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金（すいじくくわい）』  
教師のコメント  
すごく強いと言われても…。

新学期、普通の人ならば気が逸るものがあるだろ？。

しかしながら、今年度から文翔学園2年生になる有明洋太郎はそんなものとは全く無縁であった。

「あ、インフルエンザをやつとのことで治したのに、まさか予備日で休まされるとはね…」

「おはようございます、洋太郎さん。今日も気持ちの良い朝ですね。」

たった今、洋太郎に向かい美しい声で挨拶したのは、はすむかいに住む名家の一人娘『天王洲さくら』である。

「おはよう、気持ち良い朝だよ、試験さえ受けられればね。」

普段からの付き合いが洋太郎は軽くこぼした。

「それは…ご愁傷様としか言いようがありません。」

「いや、さくらは気にしなくて良いよ。悪いのは自分だから。」

一人は通学路をいつものように進んだ。

「おはよう、天王洲・有明」

「おはよう！」ぞこます西村先生」

「どーも、お勤めご苦労さん。」

いつもは誰もいない校門前には西村先生が立っていた。

「さて、振り分け試験の結果を渡そう。天王洲、よく頑張ったな。

『天王洲さくら Aクラス』

「ふーん、すごいじゃん。ぎりぎりBかと思つてたけど」

「ありがとうございます。直前に洋太郎さんから教えていただいた歴史が功を奏しました。」

「礼には及ばないよ。んでM・西村、まさかの理由で休んだ俺

はFなんだろ？」

「ああ、まあ頑張つてくれ」

『有明洋太郎 Fクラス』

「やるだけやってみますわ。んじゃあな、さくら。」

「はい、失礼します。洋太郎さん」

校門を出た二人は、そのままそれぞれの教室へと足を進めていった。

## 序章（後書き）

これからよろしくお願いします。感想いただけたら幸いです。

## 設定

試召戦争のルールにつきましては割愛させていただきます。他作品様にござりますのでそれをご覧下さい。

試召戦争の書き方を変更しています。

名前・科目については全て英語です。具体的には次のようになります。

本来 当作品

現代国語 Modern Japanese (生徒たちは現代文と呼びます)

古典 Classics

数学 Math

英語 Reading

英語 Writing (生徒たちもライティングと呼びます)

物理 Physics

化学 Chemistry

日本史 Japanese History

世界史 World History

保健体育 P.E.

例えば、明久と玉野さんがが数学で戦っている場合の表示は……

Subject: Math

Class F

Name: Akihisa Yosii

Score: 38

V S

Class D

Name: Miki Tamano

Score: 88

といった感じになり、点数は『88 75』といったようになります。

では、オリキャラ紹介をば。

有明洋太郎 Fクラス

成績に執着は無いが、本来ならAとBの瀬戸際くらいの成績はある。しかしインフルエンザにかかり、試験前日に治したもののが出席停止期間であつたために振り分け試験を欠席した（しげるを得なかつた）。

試召戦争研究会を立ち上げ、放課後は学園側で撮影した映像を見て研究なり考察なりお菓子を食べるなりしている。（そのうち番外編でやるかも）研究者気質のためあまり友達はない。

容姿は純粋な日本人、つまり黒目黒髪を短髪にしている。身長体重は標準的。

研究者気質がうまくいったのか、料理は神懸かっている。  
明久達とは特に面識はないが明久が観察処分者であることは知っている。

先生のことをM'r・Ms'・と呼び生徒については呼び捨てなり  
「さん」なりを使つていて。

天王洲さくら Aクラス洋太郎のはすむかいに住む。せいぜいBのトップクラスの成績だが前日に洋太郎から歴史を教わったのが功を奏して見事にAクラス入り。

試召戦争研究会のメンバーでは『ない』。

容姿はウェーブのかかった綺麗な金髪、身長はだいたい洋太郎より少し小さい程度。同じくお嬢様の霧島との比較で「漆黒の霧島・黄金の天王洲」と呼ばれる。体型は翔子以上のナイスバディで胸の大きさはD～Eクラス。

翔子とはパートナーでよく見かける間柄。

## 設定（後書き）

感想等なんでもお待ちしております。

## 第1問（前書き）

バカテスト 国語

以下の意味を持つことわざを答えなさい

- (1) 得意な事でも失敗してしまつ事
- (2) 悪い事があつたうえに、更に悪い事が起きたる喻え

姫路瑞希の答え

- (1) 弘法にも筆の誤り
- (2) 泣きつ面に蜂

教師のコメント

正解です。他にも（1）なら“河童の川流れ”、“猿も木から落ちる”、（2）なら“踏んだり蹴つたり”や“弱り田に祟り田”などがありますね。

有明洋太郎の答え

- (1) ホメロスでも居眠りをする。
- (2) 痛む上に塩を塗る

教師のコメント

これも正解ですが（1）は英語圏でのことわざですので次からは日本物にしてください。

吉井明久の答え

- (1) 泣きつ面蹴つたり
- (2) 教師のコメント

君は鬼ですか。

土屋康太の答え

- (1) 弘法の川流れ

教師のコメント  
シユールな光景ですね。

## 第1問

「EJGがFクラス……？2・Fって書いてあるから間違いないとは思うのだが。」

下駄箱の側にある階段を昇ると新校舎にあるAクラスの教室が見て九分九厘絶望するため、敢えて先に旧校舎からまわったが、それでもなおあまりの教室の外観に驚いていた。しかし、驚いていてもどうしようもないでの、覚悟を決め引き戸を開けると……

引き戸を開けた先にはとんだ異世界でした。

「外装もさることながら中もこれほどひどいとは思わなかつた。これを見ると廃校になつた学校の方がずっとマシだな。」

教室の隅には雲の巣が張つていて、下に敷かれている畳には所々腐つているものさえあつた。驚きなどとうに飛び越えて（よくこんな設備を整えられたなあ）と、感心さえしていた。

「あんたが件の研究会にいる有明洋太郎か？」

あ、やせいのきんにくやろうがあらわれた！

「ああ、間違いない。」

出せる手持ちなどいるわけが無いので、素直に答えた。

「部活動の所属まで知つてることはあんたがこのクラスの代表つてわけか？」

この学校では試合戦争の関係もあつてか、クラス代表には顔写真と部活動などある程度の情報が与えられる。

「ああ、この俺がクラス代表の坂本雄一だ。」

どうやらこのデカイ筋肉が代表のようだ

「ところで席は自由席なのか？」

「ああ、そのようだ。」

しかしながら、席は既にある程度埋まっているようなので、廊下に程近い席に座つた。

「わしは木下秀吉と申す、今年一年よろしくなのじゃ。」

「ああ、よろしく頼む。俺は有明洋太郎だ。」

目の前の少年?があまりにも女の子っぽい。聞いた話によると彼?は女の子だとか秀吉は一つの性別なんだという声もあるが、そんなオカルトあるはずないため制服から判断し男だと認識した。

「一応確認だが、男だよな?」

「わしは男なのじゃ!」

秀吉がそう叫ぶと周りからはそんなはずはないだの秀吉は秀吉なんだだとにかく秀吉が男であることを容認しない発言がみられた。ていうか、それしかない。

そろそろチャイムが鳴る頃に勢いよくドアが開いた。

「すいません、ちょっと遅れちゃいましたっ」

「早く座れ、このウジ虫野郎が。」

愛嬌を込めた挨拶した人に対し坂本は人間扱いをしなかつた。いや、一応『野郎』といつてるから人間として扱つてはいるのだろう。

「聞こえていいのか、あ?」

さらにこの少年に追撃を放つよくな言葉を発した。

「雄一、なにやつてるの?」

新学期なのに下の名前を知つてはいる。それすなわち一年の頃からの付き合いがあつたことを証明している。しかし、なんでそんな言い合ひをしているのだろうか?と、考えていた時。

「えーと、ちょっと通してもらえますかね。」

霸氣のない声によれよれのスースといついで立ちの冴えないオッサンがクラスに入つて來た。

「はい。このクラスの担任の福原慎です。よろしくお願ひします。」

先生は黒板に自分の名前を書こうとしたが諦めざるを得なかつた。

この教室にはチョーク1本さえも無かつたのだから。

「みんなの席にちやぶ台と座布団がありますか？何か不備があれば申し出て下さい。」

ちやぶ台と座布団で勉強させるのは、十分不備ではなかろうか？

「せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入つてないです！」

「あー、はい。我慢してください」

「先生、俺の卓袱台の足が折れています」

「木工用ボンドが支給されていますので、後で自分で直してください」

「センセ、窓が割れていて風が寒いんですけど」「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう」

本当にここは、Fクラスに勉強させたいのだろうか？

「では、廊下側の人から自己紹介をしてください。」

「木下秀吉じや。演劇部に所属してある。」

「有明洋太郎だ。試召戦争研究会に所属している。戦争の際には参謀総長に立候補するのでよしなに。」

俺が戦争の話をした際に坂本の類が上がつたのは気のせいだらうか？

「……土屋康太」

小柄な少年が名前だけを言つてさつと座つてしまつた。ふと見渡すと男ばかりであった。

「島田美波です。海外育ちで、日本語はできるけど読み書きが苦手です。あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は」

「」

今度は女子の声が聞こえた。流石にFクラス全員が男子のわけが無いようだつた。

「趣味は吉井明久を殴ることです」

特定の人物をターゲットにしたバイオレンスな趣味だつた。

「はろはろ！」

島田が笑顔で手を振る相手は、坂本にウジ虫扱いされていた、男子生徒だった。

「……あう。し、島田さん」

「吉井、今年もよろしくね」

どうやらこの二人も1年の時同じクラスだったようだ。とりあえず『触らぬ神にたたりなし』を肝に命じておこうと思った。

「一ノホン。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んで下さいね」

『ダアアーリイーン！…』

一瞬、俺も乗り気になつたがこの大合唱には流石に引いた。その後も自己紹介という名の時間潰しが続き、それも終盤に差し掛かった時のことだった。

「あの、遅れてしまま、せん…・・・」

「えつ？」

教室全体から驚いたような声が上がる。騒がしくなるクラスの中で担任の福原教諭がその姿を見て話しかけた。

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんもお願いします」

「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします。」

既に自己紹介を終えた男子生徒の一人が右手を擧げる。

「あ、は、はい。なんですか？」

「なんでここにいるんですか？」

聞きようによつては失礼な質問にあたるのだが、その相手が彼女の場合その質問に無理はない。なぜなら彼女 姫路瑞希は2年生の中でも常にベスト3には必ず入っているような人でまかり間違つてもFクラスに入ることなどない。故に彼女がFクラスにいる理由、それは……

「その、振り分け試験の最中、高熱をだしてしまいました……」

・

「そう、試験を受けなかつた、あるいは受けられなかつたかだ。まあ、むろん姫路は俺のようになに試験を休んだ訳ではないのだが。しかし、試験途中の退席は〇点扱いの為結果は俺と同じという事だ。そんな姫路の言い分を聞き、クラスの中でもちらほらと言ひ訳の声が上がる。

「そう言えれば俺も熱の問題が出たせいでFクラスに」

「ああ。科学だろ？アレは難しかつたな」

「俺は弟が事故に遭つたと聞いて実力を出し切れなくて」

「黙れ一人っ子」

「前の晩、彼女が寝かせてくれなくて」

「今年一番の大嘘をありがとう」

そんな中姫路は逃げるよう吉井と坂本の隣の席に着く。まあ、こんなバカな空気に彼女は耐え切れなかつたのだろう。

そんななかで、俺は席が遠いからあまりわからなかつたが吉井が男から好意を抱かれていることがわかり、吉井は泣いていたがあまり気にはしない。ただ一つ分かつたのは吉井にたいしては人間扱いなんてしていいないということだった。

「はいはい。その人達、静かにしてくださいね」

と担任が教卓を軽く叩いて警告を発すると。

バキイツ バラバラバラ・・・・・

教卓が体を為しておらず、うずだかく木の板や棒が積み重なつているだけだつた。

「えー……替えを用意してきます。少し待つていてください。」

福原教諭はそう告げると、教室から出て行つた。本当にこんなでいいのか？俺の中の常識も音を立てて崩れていくように思えた。姫路も苦笑いをしていた。笑つて気分が晴れるなら俺も是非そうしたものだつた。ふと気がつくと、吉井と坂本が教室から出て行つた。

廊下で聞き耳を立てているとなんか戦争とか姫路とかいう台詞が聞こえた。新学期すぐから戦争なのかと思い始めた。

担任と代表が戻り、自己紹介も再開した。須川のも終わり後は代表たる坂本のものだけであつた。

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」

「了解」

先生に呼ばれて坂本が席を立つ。

ゆっくりと教壇に歩み寄る姿は先程までのふざけた雰囲気は見られない。

「坂本君はFクラスの代表でしたよね?」

福原教諭に言われ、頷く坂本。最もクラス代表といつても最低クラスの成績者の中での一番に過ぎない。言わばお山の大将だ。AとBの境界ほどの成績の俺や、まして学年トップクラスの姫路に比べればその成績は遙かに劣るはずだが…

「Fクラス代表の坂本雄一だ。俺の事は代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ。さて、皆にひとつ聞きたい」

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが……不満はないか?」

『大ありじやあつ!!』

Fクラスの魂の叫びが響き渡る、おおかた自業自得なんて言葉には聞く耳を持たないだろう。

「そこで俺は… Aクラス相手に試験召喚戦争を仕掛けよつと思つ。」

坂本率いるFクラスは戦乱の道に足を踏み入れた。

## 第1問（後書き）

地の文は特にない場合は洋太郎の視点になっています。  
感想等を待っています。

## 第2問（前書き）

バカテスト リーディング

問題：以下の英文を訳しなさい。

「This is bookshelf that my gra  
ndmother was used regularly.

姫路瑞希の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

天王洲さくら・有明洋太郎の答え

「これは本棚で私の祖母が愛用していた物でした。」

教師のコメント

正解ですが、that以下の文は前にもつていった方がなお良いでしょう。

土屋康太の答え

「これは」

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

吉井明久の答え

「」

教師のコメント

できれば地球上の言語で。

## 第2問

坂本はAクラスへの戦争を行おうとしている、しかし……

「勝てるわけがない」

「これ以上設備を落とされるなんて嫌だ」

「姫路さんがいたら何もいらない」

最後のものは除くとして当たり前の反対意見が異口同音に出て来る。文月学園のテストは他の学校と一線を画している。それは、『制限時間内の問題数無制限。』その為、学力次第では、どこまでも点数を取ることができ、成績が優秀な者と低いものとの差がはつきりと出る。Aクラスの生徒の一人当たりの点数は大雑把に見てFクラスの生徒一人の3倍程、下手をすれば4倍にまでいく恐れがある。むろん召喚獣はテストの点に比例して強くなるのだから、その戦力の差は歴然だ。

「そんなことはない。この俺が勝たせる、いや勝たせてみせる。」そんな圧倒的不利にも拘らず、坂本はそう宣言した。そんな坂本の発言に対し、当然のことながらクラス内で否定的な意見が響き渡る。「根拠ならあるさ、このクラスには試召戦争で勝つ事のできる要素が揃っている。」

はてさて、どう言いくるめるのかな？姫路や俺を除けば基本的に戦力のスペックはFクラスなんだぞ。

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い。」

「…………（ブンブン）」

「は、はわつ」

必死になり、顔と首を横に振って否定の意志を示しているが、あの体勢と頬についている畳の跡で間違いなく彼はクロである。

「土屋康太。こいつがあの有名な、寡黙なる性識者だ」

「…………（ぶんぶん）」

土屋康太という名には余り聞き覚えがないが「ムツツリー」という通称は別である。その名は男子には畏怖と敬畏を、女子には軽蔑を以て挙げられる。まあ、授業以外の時間をわざわざ試召戦争の研究をしている俺にどつちやどつでもいい話ではあるが、他の男子生徒からはざわめきたつていい。

畠の跡を手で自分で押さえる土屋。既にバレバレだが、異名は伊達  
じゃないようだ。

「姫路については言つまでもないだろ。」

え、  
ね  
私ですか？」

「そうだ、僕らには姫路さんかいるんだよ」

姫路は自分で驚いているが、学年次席あるいは三席をFクラスのエースと言わずして何と言おうか。

「木下秀吉だつている」

「ああ。アイツ確か、木下優子の……」  
確かに姉の木下優子は学年ベスト10レベルの人間だろうが、木下秀吉の名は聞かない。心配だつたので一応確認を取つた。  
「なあ、木下。おまえは振り分け試験をちゃんと受けたよな?」  
「うむ、そうじやが……それがなににあるのか?」

「いや、気にしないでくれ。」「ところで有明よ。わしのことじやが、木下と言われると姉上と間

違える者か出て来る故、秀吉と読んでほし」

とりあえず、試験を最後まで受けたにもかかわらずFクラスだということは姉と違い彼の学力はFクラス相当だということだ。

その間にも坂本が自分の事を言つていて過去に神童と呼ばれていたらしいが、Fクラス代表 お山の大将 程度では余り戦力にならな

いことは確かだ。

「それに、吉井明久だつている。」

あれだけ、ガヤガヤしていた教室が水を打つたように静かになつた。  
「ちょっと雄二ーーどうしてそこで僕の名前を呼ぶのさー全くそんな  
必要はないよね！」

『誰だ、吉井明久つて』

『聞いたことないぞ』

『ホラ！僕は雄二たちと違つて普通の人間なんだからね』

「そうか。知らないようなら教えてやる。こいつの肩書きは《観察  
処分者》だ』

『それつてバカの代名詞じゃなかつたか？』

「ち、違うよつーちょっとお茶目な十六歳につけられる愛称で  
ぶざまな言い訳をする吉井だが……」

『そうだ。バカの代名詞だ。』

あつさり、坂本に切り捨てられる。

『肯定するな、バカ雄二ーー！』

「あの、それつてどういうもののなんですか？」

バカとの等式に繋がる観察処分者の存在を知らない姫路が疑問の声  
をみせる。

「具体的には教師の雑用係だ、力仕事などをを行うから、特例として  
試験召喚獣が物に触れることができるんだ。』

「そりなんですか？それつて凄いですね。試験召喚獣つて見た目と  
違つて力持ちですから、そんなことができるなら便利ですよね。』

「あはは。そんな大したもんじやないんだよ』

姫路に褒められ吉井は謙遜する。

『おいおい。《観察処分者》つてことは、試召戦争で召喚獣がやら  
れると本人も苦しいってことだろ？』

『だよな。それならおいそれと召喚できないヤツが一人いるつてこ  
とになるよな』

そう、観察処分者は召喚獣の疲労や痛みの一<sup>ヒ</sup>部がフイードバックされる。故においそれとは召喚出来ないが、

「気にするな。どうせ、いてもいなくとも同じような雑魚だ」

「雄一、そこは僕をフォローする台詞をいつべきだよね？」

坂本はやはり切り捨てた。

「そして、こいつがFクラスの秘密兵器ジョーカー有明洋太郎だ。」

『誰だそいつ？』

『こんなやつが秘密兵器なのか？』

俺のことなどそういう知らないので、また疑問の声が響く。

「こいつはな、試召戦争研究会にいるんだ。言わばこのなかで誰よりも試召戦争について詳しい。そうだろ？」

「まあな。放課後を全部試召戦争に使ってる奴なんてそういうないからな。」

「それに、成績もAクラスレベルだ。」

「おいおい、買い被るなよ。せいぜいAのぎりぎり、下手すりやBだぞ？」

「それでも問題ない。有明には参謀総長をやってもらいたい。いいか？」

『いいとも！』

「じゃあ、決定だ。頼むぞ。」

「承知した、そのかわり俺の指示には従えよ。わかつたな。」

「既、この境遇は大いに不満だりつ？」

『当然だ！』

「ならば全員筆を執れ！ 出陣の準備だ！」

『おおーーっ！』

Fクラスの団結力が頂点となつた。

「明久にはDクラスへの宣戦布告の大天使をやつてもうひつ

「・・・下位勢力の宣戦布告の使者つてたいてい酷い田に遭つよね？」

当然の事であるが藪蛇なので、俺も坂本もそんな事はおくびにも出さない。

「大丈夫だ。」これは普通の学校だ。間違つてもそんなことない。」「本当に?」

「ああ。もちろんだ。俺は友人を騙すような真似はしない」「わかつたよ。それなら使者は僕がやるよ」

「ああ、頼んだぞ」

吉井明久は騙されやすい、いけにえには最適。覚えておけ。吉井はロクラスに向かって歩き出した。

.....

「騙されたあつ！」

「やはりそうきたか」

「やはりつてなんだよー予想通りじゃ ないかー！」

「当然だ。そんなことも予想できないで代表が務まるか当たり前の事である。

「少しほ悪びれろよー！」

「吉井君、大丈夫ですか？」

「あ、うん。大丈夫。ほんとかすり傷」

「吉井、ホントに大丈夫？」

「平気だよ。心配してくれてありがとう」

「そう、良かつた・・・・・。ウチが殴る余地はまだあるんだ・・・

・・・・・

「ああつーもうダメー死にそうー！」

姫路は吉井のことを中心していたが、島田のはただの追い撃ちである。

「そんなことはないでもいい。今から屋上でマーティングを行なうが。

有明も来てくれ。  
「

「わかった。その前に飯を買わせてくれ。普段俺は学食だ。」

「了解した。なるべく早く来い。」

そういうつて、坂本たちは屋上へと向かい、俺は昼飯を買いに行くのであつた。

## 第2問（後書き）

感想を隨時募集中です。

### 第3問（前書き）

バカテスト 数学

以下の問いに答えなさい。

「(1)  $4 \sin X + 3 \cos 3X = 2$  の方程式を満たし、かつ第一象限に存在するXの値を一つ答えなさい。

(2)  $\sin(A+B)$  と等しい式を示すのは次のどれか、?の中から選びなさい。

$$? \sin A + \cos B$$

$$? \sin A - \cos B$$

$$? \sin A \cos B$$

$$? \sin A \cos B + \cos A \sin B$$

姫路瑞希の答え

$$「(1) X = /6 (2) ?」$$

教師のコメント

そうですね。角度を「。」ではなく「」で書いてありますし、完璧です。

有明洋太郎の答え

$$「(1) X = /6 (2) きつと？」$$

教師のコメント

確信を持つて下さい。

土屋康太の答え

$$「(1) X = およそ3」$$

教師のコメント

およそをつけて誤魔化したい気持ちもわかりますが、これでは解答に近くても点数はあげられません。

吉井明久の答え

「（2）およそ？」

教師のコメント

先生は今まで沢山の生徒を見てきましたが、選択問題でおよそをつける生徒は初めてです。

### 第3問

屋上には、ミーティングのために俺と坂本の他に吉井、島田、姫路、土屋、そして秀吉がいた。

「すまない、一つ確認なんだが、なんで坂本（司令官）と俺（参謀総長）の他にこんなに人がいるんだ？指揮系統の人員が多くるのは余り良くないと思うが。」

「わかった。紹介しよう。土屋に關しては諜報という分野では右に出るものがないと思っている。姫路に關しては特に言うことは無いだろう。彼女無しでは作戦もなにもない。後の連中はいつもつるんでる奴らだ。こいつらには中隊長を任せよつと思つ。」「了解。それなら特に異論はない。」

「明久。宣戦布告はしてきたな？」

「一応今日の午後に開戦予定と告げて來たけど」「なら先にお昼ご飯ね？」

「おい明久、今日くらいはまともな飯食えよ？」

腹が減つては戦は出来ない。今も昔もこれは大差が無い。

「そう思うなら、パンでもおごつてほしいんだけど」

「えつ？吉井君つてお昼食べない人なんですか？」

「いや。一応食べるよ」

姫路の質問に吉井は顔をそらし答えた。

「・・・あれは食べていると言えるのか？」

普段から人間扱いされていない坂本にまで憐れまれる吉井。

「何が言いたいのさ」

「いや、お前の主食つて・・・水と塩だらけ」

あまりの栄養価の無さに絶句した。

「きちんと砂糖だつて食べているわ」

反論をしていくがそういう問題ではない。

「それは、食べると言つたのだろうか？仕方ないから買つてきたおにぎりでもやるよ。」

「ありがと、有明君。君は命の恩人だよ。」

100円程度のおにぎりで命の恩人扱いされた。

「こんなもん100円位で買えるぞ。なんで飯食わねえんだ？」

「それは……」

「……明久は食費までも趣味に使つ。」

土屋からの的確な解答が出て来た。

「・・・あの、よかつたら私があ弁当作つてしまふうか？」「え

「落ち着け明久、ここは平安時代じゃねえ」

よしいはこんらんしている！

「本当にいいの？僕、塩と砂糖以外のもの食べるなんて久しぶりだよー。」

吉井の生命力は「キブリ並」なのか？

「はい。明日のお昼で良ければ」

「よかつたぢやないか明久。手作り弁当だぞ？」

「うん。やつたあ！」

坂本のからかう声もわからず吉井は大喜びだ。

「・・・ふーん。瑞希つてずいぶん優しいんだね。吉井だけに作つてくるなんて」

島田の牽制球が放たれた。

「あ、いえ！その、皆さんにも・・・・・・」

「俺達にも？いいのか？」

「はい。嫌じやなかつたら」

「ほほ赤の他人に近い俺でも構わないのか？」

「はい、参謀は頭を使いますから。」

いいはなしだなー。俺を含め7人分の飯を嫌な顔一つせずにつくる

んだから。

「それは楽しみじゃのう。」

「……（「ククク）」

「まあ、メシ代が浮くのはありがたい。」

「姫路さん。ずっと前から思つてたんだけど、僕は姫路さんの事を好き

「明久、今言うと弁当が無くなるぞ。」

「にしたいと思いました。」

みんな目が点。

「明久、これでは唯の変態だとカミングアウトしただけじゃぞ。」

「だつて、お弁当が、お弁当が……」

吉井はカロリーの為なら恥をも厭わない。その証拠に姫路の顔は引き攣っている。

「雄二。一つ気になつておつたのじゃが、どうしてロクラスなんじゃ？ 段階を踏んでいくならEクラスじやるつし、勝負にでるならAクラスじやるう？」

「そういえば、確かにそうですね」

秀吉と姫路がEクラスを飛ばした理由について質問していた。

「とりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからな」

「え？ でも、僕らよりはクラスが上だよ？」

「まあな。でも、オマエの周りにいる面子をよく見てみる」

明久はその場にいるメンバーを見回している。

「美少女が一人と馬鹿が一人とムツツリが一人、それに僕がよく知らない人が一人いるね。」

「誰が美少女だと！？」

「ええっ！？ 雄二が美少女に反応するの！？」

「・・・・・（ポツ）」

「ムツツリー！ まで…？ どうしよう、僕だけじゃツツコミ切れない

！」

「落ち着け吉井。そういう区分じゃねえ。いいか、Fクラスには姫路がいる。Eクラス程度なら姫路に回復試験受けさせれば、後はごり押しで十分だ。戦うだけ時間のムダだからだ。」

「だったら、最初から目標のAクラスに挑もうよ」

やはり、吉井はわかつていなかつた。

「いや。姫路たちの準備ができる以上、今Aクラスに挑んでも瞬殺されて終わりだ。仮に姫路と有明が万全でも無理だろう。俺の代わりに坂本が説明してくれた。」

「それはどういうことじや？」

「Aクラス50人中40人は問題はない。だけど、残りの10人がヤバいんだ」

「じゃあ雄一、Aクラスに勝つのは無理なんじや？」

「そのAクラスに勝つ為の布石がDクラス戦だ。そうだろ？」

「（ニヤリ）さすが、有明。その通りだ」

「お褒めに預かり至極光栄。」

坂本がみんなのほうを向き、みんなが坂本のほうを向く。

「いいか、お前ら。ウチのクラスは 最強だ」

雄一の声が響き渡り、みんなは無言で頷いた。

試合戦争の開幕戦、参りましょう。

### 第3問（後書き）

感想・要望を隨時受け付けています。

#### 第4問（前書き）

バカテスト 物理

以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい。  
「光は波であつて、（ ）である。」

姫路瑞希の答え

「粒子」

教師のコメント

よくできました。

土屋康太の答え

「寄せては返すの」

教師のコメント

君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

「勇者の武器」

教師のコメント

先生もRPGは好きです。

有明洋太郎の答え

「キングダムハーツの主題歌である宇多田ヒカルの曲」

教師のコメント

よく、解答欄にその文字数を埋めましたねえ。  
よく、解答欄にその文字数を埋めましたねえ。

## 第4問

PM1：00 Dクラスとの戦争の火ぶたが切つて落とされた。

「いいか、姫路。おまえはこの計画での要だ。1点でも多く点を稼いでくれ。」

「わかりました。でもそれなら有明君にもやつしてもらつた方が良いのでは無いでしょうか？」

「いや、有明は必要ないと思つてこる。」

「ついでに言えば、今回の作戦は端的に言えば姫路のための時間稼ぎに過ぎない。また、坂本は俺を隠し玉として扱い、次の試合から主戦力として使つらしい。」

「はい、ありがとうございます。皆さんの為にも頑張ります。」

「ああ、そうしてくれ。」

そうして、俺は次の戦争のため、姫路はこの戦争のけりをつけるために回復試験に臨むのだった。

### 中堅部隊

中堅部隊には吉井・島田中隊長の下に20人が集っていた。

ここからは明久の視点でお届けします。

僕と島田さんが率いる中堅部隊は、先行部隊の少し後方で待機している。与えられた任務は前線維持と時間稼ぎだ。

「吉井！Dクラスの援軍が到着したみたいよ」

「うん。そうみたいだね」

『戦死者は補習ううう——!』

ドスのきいた声が廊下に響きわたる。あれは鉄人の声だな。間違いない。

「島田さん、中堅部隊全員に通達」

「ん、なに？何で伝えんの？」

「総員退避、と」

「！」の意気地なし！」「

殴られた。しかもチョキで。

「目が、目があーーー！」

某大佐みたいな呻き声を上げる。うう、あれでも直接攻撃じやなかつたのに。

「目を覚ましなさい、この馬鹿！アンタは部隊長でしょう！臆病風に吹かれてどうするのよー。ウチらの役割を忘れちゃったの？吉井？」「じめん。僕が間違っていたよ。補習室を恐れずに僕らの役割を全うしよう！」

「ええ。多対一の状況をつまく作れば、そう簡単には死はないわよ。」

「そうだね。よし、やるぞ！」

「うん、その意気よ、吉井！」

拳を擧げる僕達。大丈夫、僕らならやれる！

「隊長、前線部隊が撤退を始めたぞ。」

「総員退避よ」

今度は島田さんが臆病風に吹かれたようだ。

「さつき言つてることと違うよね。」

「総員退避で問題ないわよね？」

島田さんは笑顔かつ低い声で答えた。うう、島田さん笑顔が怖いよ。

「よし、逃げよう。僕らには荷が重すぎた」

「そうね、ウチらには精一杯努力したわ」

何もしていなければ、僕は自分の命のほうが大事だし・・・・・。

すると、本陣にいるはずの横田君がこちらに走つてくる。なんだろう？  
「代表より伝令があります。」「

横田君は僕たちに雄一からの伝令を伝える。

「あ、吉井。代表が最後に『逃げたらロロス』だ、そうだ」

「全軍突撃しろおーっ！」

僕たちは気が付いたら戦場の最前線へ向つて全力ダッシュしていった。

「明久、援軍に来てくれたんじゃな！」

「秀吉、大丈夫？」

「うむ。言いたいところじゃが、正直旗色が悪い」  
僕らが到着した時には、十五人いた先行部隊が秀吉を含めて四人まで減っていた。

「厳しいね。とにかく、秀吉たちは補充試験を受けてきて、このままだと全滅になっちゃうし。前線は僕たちにまかせてよ。」

「すまぬが、頼むのじや。」

秀吉たちは補充試験を受ける為教室へ向け走つていった。  
フィールドは化学の布施先生・五十嵐先生、そして、総合科目で学年主任の高橋文史だ。

「島田さん、化学の自信は？」

「全くなし。60点台常連よ。」

「うん、やっぱり学年主任のところまで行つて勝負するしかないみたいだね」

「そうみたいね」

僕らは気づかれないように壁際を歩き学年主任である高橋先生のところを田指した。

しかし、

「？？」「あつーそこにいるのはもしゃ、美波お姉さまー・五十嵐先生、こっちに来てください！」

島田さんが清水さんに見つかってしまひ。くつ、仕方ないこ

こは・・・・・・。

「よし、島田さん、ここは君に任せて僕は先を急ぐよー。」

「ちよつ・・・普通は逆じゃないー!?』『いいは僕に任せ先を急  
げ』じやないのー?』

「そんな台詞、現実世

!

「よ、吉井！このゲス野郎！」

!

傳記の書籍方ノ一卷

お姫さま！迷かしません！」

「ぐ、美春！やるしかないってことね……！」

「サモン 試験召喚」

Subject: Chemistry

C l a s s F

Name: Minami Shimada

Score: 53

10

OSSD

卷之三

S  
C  
O  
N  
E  
S  
A

二人の召喚獣は武器を構えて正面からぶつかり合つた。しかし、  
銃迫り合いを繰り広げるが、島田さんの召喚獣が力負けして獲物を  
取り落とし、相手の刀を喉元に突き付けられた。というか島田さん、  
点数サバ読んでたな。60点なんていつてないじゃないか？

「補習室？・・・・・フフッ。この時間ならベットは空いていますからね」

あれ? 清水さん補習室はそこちじやないよ? そこのあるのは保健室だけど・・・・・。

ま、待て！清水さん！」

「ん?何ですか?美春とお姉さまの邪魔をする人は、全員殺します」

「……失礼しました。」「

ダメだ叶いつこない。

「アキ！なにやつてゐるのよ！」「

「「めん、やつぱり島田さんに任せゐよ。」「

「誰か、助けて～。」

島田さんの悲鳴が聞こえるが僕は先に進もう。死して屍を拾つものなしだから。

「あぶないつ。試験召喚」

Subject : Chemistry

Class F

Name : Ryo Sugawa

Score : 76

V S

Class D

Name : Miharu Shimizu

Score : 54

間一髪、須川君の召喚獣が清水さんの召喚獣を倒してくれた。

「……アキ……」

「……記憶にございません。」

「あんた、ウチのこと見捨てたわね！」

「ああ、島田さんが錯乱状態になつた。誰か島田さんを止めて～」「

「落ち着け島田！吉井は味方だ！」

「須川君！早く島田さんを本陣まで！」

須川君が体を張つて島田さんを運んでくれた。ふう、悪は去つた！

その後も、先遣部隊が合流して、僕たちは善戦していたがやはり個人の力で劣るFクラスは一人、また一人と戦死していく。

「隊長、Dクラスが教師の数を増やそうとしている。」

「うーん。雄一に相談をしてくれないかな。雄一ならいいことを考えてくれるはずだよ。」

しばらくすると、校内放送が流れた。雄一の作戦だらう。

『連絡いたします。船越先生。体育館裏にて吉井明久君がお待ちです。生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです。』

今なら僕は人を殺める事も出来ると思った。

吉井視点終了

洋太郎の視点に戻ります。

『連絡いたします。船越先生。体育館裏にて吉井明久君がお待ちです。生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです。』

まさか、ここまでやるとは。船越先生は婚期をとっくに過ぎていて、生徒に数学の単位と引き換えに交際を求めるまでになつたほどだ。これなら船越先生は一晩中だつて待つだろう。いけにえ吉井の人生には申し訳ないが。

「さて、姫路に有明。回復試験は済んだか。」

「はい、バツチリです。」

「まあ、戦争に使つてゐる科目はな。」

「んじゃあ、そろそろ出るぞ。」

「でもDクラスの代表さんも護衛を引き連れてゐると思いますよ。」

「まあな。でもなあ、姫路瑞希はAクラスにいるのが当たり前だとDクラスの連中は思つてゐる。そうだろ、坂本。」

「正解だ。今はAクラスの奴らも下校し始めている。それを狙うんだ。姫路はあくまでも下校してゐるそぶりで代表の平賀だけを狙え。有明は本隊に合流してもらう。」

よつやく、戦場に立てる。この高揚感でいっぱいだった。

俺達が戦場にきたときには既に放課後であり他クラスもちらほら見られる。既にDクラスの代表である平賀の姿も見られる。一方Fクラスは下校に紛れてのゲリラ戦を展開している。

「坂本、どいつを殺ればいい？」

「とりあえずあそこにデカイやつがいるだろ。あれが部隊長を務める塚本だ。あいつを頼む。」

「了解。」

俺は塚本のところに行く途中秀吉に会った。

「秀吉、あれが塚本か？」

「うむ。今この科目はライティングでの、わしは苦手なのじや。」

「わかつた。ライティングなら何とか行けるな。」

「Fクラス有明洋太郎。あんたに挑むぜ試験召喚！」

「試験召喚！」

Subject : Writing

Class F

Name : Youtaro Ariake

Score : 158

VS

Class D

Name : Kouichi Tsukamoto

Score : 129

塚本の得点はDクラスにしてはやや高い。装備はスタンダードな両刃刀に鎖帷子だ。それに対し俺の装備はどうと……

「洋太郎よ！お主の装備は明久よりひどいではないか！」

Tシャツ短パンにロープを羽織り、Fと描かれた首輪を付け、武器は短い木の棒だった。

「何を構えてみれば、とんでもないクズ装備じゃないか！今楽にしてやる。」

塚本はその装備の軽さから弱いと判断し、ダッシュをして突撃を仕

掛ける……

「10点を消費し、ツヴァイアイロー。」

そう呟くと召喚獣が木の棒を振り、2本の矢をダッシュ中の塙本に放つ。召喚獣の操作にはあまり慣れていないのか急には止まれない塙本の召喚獣はその攻撃を頭と腹部にもろに喰らい、

Score 129 0 あつさり戦死した。

『戦死者は補習うー！』

どこからともなくMr.西村がやつて来て塙本を補習室へと連れていった。

指揮系統を失ったDクラスが早々に立ち直るわけもなく、みな混乱していた。その隙だつたろうか？姫路が大剣で平賀の召喚獣を一刀両断していた。

Fクラスは、見事開幕戦を勝利で飾った。

#### 第4問（後書き）

感想・要望等待っています。

次回予告つけてやるべきだらうか？

## 第5問（前書き）

バカテスト 物理

問題：X線を発見した、第1回ノーベル物理学賞受賞者は誰でしょう？

天王洲さくらの答え

「ヴィルヘルム＝レントゲン」

教師のコメント

正解です。

吉井明久の答え

「キュリー夫人」

教師のコメント

恐ろしく普通なのでびっくりしています。キュリー夫人は夫のピエールとともに放射線の研究でノーベル物理学賞を取っています。

有明洋太郎の答え

「川端康成」

教師のコメント

……物理学賞ですよ。

## 第5問

ロクラス代表平賀源一討死

『か、勝った！勝ったぞおおおーつー』

『うおーーつー』

Fクラスの勝闘かちとうとロクラスの悲鳴が混じり廊下に響き渡った。

『凄えよ！本当にロクラスに勝てるなんて！』

『これで畳や卓袱台ともおさらばだなー』

『坂本雄一サマサマだなー』

『やっぱリアイツは凄い奴だつたんだなー』

『坂本万歳！』

『姫路さん愛しますー！』

雄一を褒め称える声（最後のは明らかに違つ）がいたると「さから聞こえる。

「あー、まあ。なんだ。そう手放しで褒められると、なんつーか」

「坂本！握手してくれー！」

「俺も！」

完全に英雄扱いの坂本に限らず、他のクラスメイト達もあの教室に相当不満があつたようだ。

そんな風に思いながら眺めていると、吉井が坂本に近づいてきた。

「雄一ー！」

「ん？明久か」

坂本が振り向く。そこへ、吉井が駆け寄つて、

「僕も雄一と握手をー！」

手を突き出す。

「ぬおーー！」

ガシイツ

「雄一ーーーじつして握手なのに手首を押されてるのかなーーー」

「押されるにーーー決まっているだろ？がーーーーフンシーーー！」

そんな訳がない。きっとなにかあるから手を押さえているんだ。

「雄一、皆で何かをやり遂げるって、素晴らしいね」

「……」

「僕、仲間との達成感がこんなにもいいものだなんて、今まで知らな間接が折れるように痛いいつ！」

「今、何をしようとした」

多分、坂本の手首を曲げようとした。

「も、もちろん、喜びを分かち合つたための握手を手首が痛いいつ！」

「おーい。誰かベンチを持ってきてくれ！」

「す、ストップ！僕が悪かった！」

「……チツ」

坂本は舌打ちをして吉井を解放する、この二人は試合戦争が終わつたというのにいつまで争つているつもりなんだ？しかも、仲間同士で。あのまま続けば、吉井の生爪は坂本のベンチにより剥がされいたかもしれない。

「……ブツブツ……」

すると、坂本が何かをつぶやきはじめる。

「……生爪……」

俺の予想は正解のようだった。

『あははは』

Fクラスの皆から笑顔と笑い声が自然と溢れ、勝利の喜びを味わっている。

そこに、Dクラスの代表の平賀が雄一にヨタヨタと歩み寄ってきた。平賀「まさか姫路さんがFクラスだなんて・・・・・信じられん」

「あ、その、さつきはすいません・・・・・」

「いや、謝ることはない。全てはFクラスを甘く見ていた俺たちが悪いんだ。ルールに則つてクラスを明け渡そう。ただ、今日はこん

な時間だから、作業は明日で良いか？」

「もちろん明日で良いよね、雄二？」

しかし、坂本からは予想外の（俺にとっては当然の）答えが返ってきた。

「いや、その必要はない」

「え？ なんで？」

「Dクラスを奪う気はないからだ」

「雄二、それはどういうこと？」

他のFクラスのメンバーも明久と雄二の会話に耳を傾けていた。

「忘れたのか？ 僕達の目標はあくまでもAクラスのはずだろ？ それに、この戦いは、あくまで打倒Aクラスの為の布石だと言ったはずだ。そして、設備を交換しない理由は大きく三つある」

今回は説明を坂本に任せてしまおう。

「理由？」

「一つ目は、Dクラスの設備に満足して、今後の試合戦争への影響を無くす為、つまりモチベーションの維持が目的。二つ目は、召喚獣の扱いに慣れる為。」

「あつ、なるほど。だけど、もう一つは？」

「三つ目は、次のBクラス戦の為の下準備だ。」

「え？ Bクラス戦？ 今度はBクラスと戦うの？」

吉井だけではなく、他のメンバーも疑問符を浮かべている。

「とにかく、設備の交換はするつもりはない。ただし条件がある

「一応聞かせてもらおうか」

理由の説明を終えた所で坂本は平賀との交渉に移った。

「大したことではないさ。そこのベランダに置いてあるBクラスの室外機を俺が合図したら使用不能にして欲しい」

「それだけでいいのか？」

「当然、設備を壊すんだ教師に睨まれると思うけどな」

「それくらいなら構わないさ」

「交渉成立だな」

Dクラスとの交渉も終了し、今日は解散といつことになった。

「さて、これからは俺の時間だ。今日のデータを見ておきますか」  
試合戦争の様子は学園側で録画をしている。それを借りて我が試合  
戦争研究会は、試合戦争を見ている。いつもならもう一人いるのだが  
が他の事があつたのだろう。今日はいなかつた。

「おお、まさか観察処分者があそこまで活躍するとはな。」

正直な所驚いた。観察処分者（バカの象徴）である吉井明久がここまで活躍するとは、点数では断トツで低く、しかも装備は改造成服に木刀と無いにも等しいレベルだがDクラスを圧倒していた。単純な点数比べじやないとこに試合戦争の面白みがあるのだが、ここまで搔き回してくれるとは。吉井明久の戦力を上方修正して、家に帰つた。

翌日、先日のDクラス戦で消費した点数を回復していた。一限の試験監督がM.S.・船越だつたため吉井は人生の危機に陥つていたが事なきを得たようだつた。そういうえば、今日は姫路が昼飯を作ってくれるのだが……

「昼飯食いに行くぞ。今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすつかな」

「ん？ 食堂に行くの？ だつたら一緒にいい？」

「ああ、島田か。別に構わないぞ」

「彼らは忘れているようだつた。」

「あ、あの。皆さん……」

「うん？あ、姫路さん。一緒に学食に行く？」

「あ、いえ。え、えっと……お、お昼なんですかけど、その、昨日の約束の……」

「おお、もしやお弁当かの？」

「は、はい」

と言つて、身体の後ろに隠していたバックを出してくる。たすが7人分だけあってデカイ。

「それでは、せっかくの『』馳走じやし、屋上で頂くとするかのう」「そうだね。」

「はい。みなさんの分もあるので大丈夫です」

「そうか。それならお前らは先に行つてくれ

「ん？雄一はどこか行くの？」

「飲み物でも買つてくる。昨日頑張つてくれた礼も兼ねてな」

「あ、それならウチも行く！一人じゃ持ち切れないのでしょ？」

「悪いな。それじゃ頼む」

二人は教室を出て行つた。俺を含めた、残りの面々は屋上へと向かつた。

みんなは姫路さんのお弁当に一斉に歓声をあげた。よくこれを作り上げたなあと思う程の量。俺が作るのなら丸一日かかると思つ。料理は好きだし周りからは評判なのだが、いかんせん凝つてしまい時間がかかる。故にいつもは昼飯は学食なのだ。

「それじゃ、雄一には悪いけど、先に

「・・・・・（ヒヨイ）」  
「あつ、ずるいぞムツツリーー！」。

素早い動きでムツツリーがHビフライをつまみ取り、流れるように口に運び

「・・・・・（パク）」

バタン ガタガタガタガタガタ

俺ら3人は顔を見合せた。何が怒ったのか？

「わわっ、土屋君」

姫路さんが慌てて、配りうとしていた割り箸を取り落とす。

ムクリ

土屋は起き上がった。

「・・・・・（グツ）」

ムツツリーは姫路さんに向け親指を立てた。

「あ、お口に合いましたか？良かつたですっ」

そんな土屋の反応に姫路さんは喜んでいる。

足が未だガクガク震えているのはビリしてだらうが？まるで、KO寸前のボクサーみたいだ。

「良かつたらどんどん食べてくださいね」

そんな笑顔で勧めてくると断れない。しかしながら、命を大事にしたい俺はこう言おうとした。

「姫路、その料理のレシ……」

「あ、UFO！」

「え、どこですか？」

吉井（バカ＝フェミニスト）が遮りやがった。

少年アイコンタクト中…

（おい、なにをしてくれた。）

（ダメだよ、有明君。これを言つたら姫路さんが傷つこちやうよ。）

（姫路は女子ゆえ、かわいそうなのじや。）

（おまえら、死にたいのか？今のうちに問題を解決しておかないと姫路はますます料理といつも殺戮兵器を生み出すぞ。おまえらの

やつてていることは問題の先送りに過ぎない。俺は現実を話す。）

俺は意を決して姫路に残酷な現実を告げようとしたときだった。

「おう、待たせたな！へー、」じゅうじゅうじゃないか。どれどれ？」

坂本（フュミニストその2）が登場した。

坂本（フュミニストその2）は素手でワインナーを口に放り込み、パク……バタン ガシャガシャン、ガタガタガタガタガタジュースの缶をぶちまけて倒れた。ありがとう。おまえの犠牲は忘れない。しかし、確信した。コイツは、本物だ。しかも、ワインナーだけでの威力。どうやつたら、ワインナーを殺人兵器に調理できるんだろうか？ただ油を引いて焼くだけなのだが

「あ、足が・・・・・攀つてな・・・・・」

「そうなの？坂本ってこれ以上ないくらい鍛えられてると思つたよいい加減にしろ、と正直思つていた。

「島田さん。その手の辺りにさつきまで虫の死骸があつたよ

「ええっ！？早く言つてよ！」

「ごめんごめん。とにかく手を洗つてきた方が良いよ

「そうね。ちょっと行つてくる

あのバカがリスクを高めやがつた。

もう付か合つてられない

「姫路、おまえの料理のレシピを見せてくれ。」

「あ、はい。どうぞ。」

吉井達が何をしているんだ。というような顔で睨みつけていたが、そんなの関係ねえ！レシピを一読…せずとも分かつた。何故調味料に塩酸やら硝酸やら、クロロ酢酸とかがあるのだろうか？

確認をこめて他のレシピも見たが喜ばしい（？）ことに、このお弁

当に安全地帯など無かつた。味見をしたのだろうか？や、薬品は調味料じゃない！とか言いたいことは多々あるがまずはこれだけ言つておこひ。

「姫路、おまえの料理は料理じゃなくて唯の殺戮兵器だ。」「…………えつ。」

姫路は驚いているようだが、俺は更にこいついた。

「姫路、普通の料理だつたら食べてすぐには人は倒れない。」「えつ、でも頬つぺたが落ちるほどおいしいって言いますよ。」「それは慣用句だ、実際美味しいもの食つて頬つぺた落ちたことがあるか？」

「ないですね。」

「だつ、つと話が逸れたな。とりあえず、料理に薬品はつかうな。塩酸や硝酸とかは人間の口には入れてはいけない。」

「そつなんですか、ごめんなさい。」

家で料理の基本（つていうか人間の基本）を畱わなかつたのか？

「まあ、俺に謝るより土屋や坂本に謝ろうつな。」「

「そつですね。」

「そついえば雄二」、次はBクラスと戦つんだよね？」「

「そつだが、それがどうした？」

今は犠牲になつた人たちも皆復活を遂げ、のんびりお茶をすすつている。お茶には殺菌成分カテキンが含まれているので、坂本と土屋には大量に飲ませている。

「「Jの前、Bクラス戦はAクラスに勝つために必要だつて言つてたけど、一体どういうことなの？」

「うむ、それはワシも気になつておつたところじや」

「正直に話そう。俺たちはAクラスに勝てない。」坂本が不都合な真実を口にした。

「えー？じやあ僕たちの目標はBクラスつてこと？」

「いいや、そんなことはない。Aクラスをやる

「どうこうじじゃ？話がみえんのじやが」

「クラス単位では万に一つ勝ち目はない。その理由は…有明、頼む」

「任された。ぶっちゃけた話Aクラスのトップ10が厄介過ぎる。まあ、そのうちの1人が姫路だから、今Aクラスには9人だが、その十人は全員が腕輪持ちだ。」

皆は絶句していた。

「そこでだ、勝負の内容を一騎討ちにするんだ。その交渉材料にBクラスを使う。順を追つて説明する。まず、Bクラスに勝利し、設備交換を行わずAクラスに対し試召戦争の準備ができると伝えてもらひ。そして、俺たちがAクラスに宣戦布告するときに一騎討ちという条件が拒否された場合、BクラスをAクラスへ攻め込ませ、その勝負の直後Fクラスと戦つてもらひといった具合に交渉する。」

「とにかくBクラス戦だ。細かいことはこの後教えてやる。Bクラス戦のポイントは三つ。まず一つ目だが、開戦早々の渡り廊下戦に素早く勝利し、戦場をBクラスの教室の入り口にすること。」「どうして、Bクラスの教室の入り口なの？」

島田がわからないらしく問う。

「これには、参謀として俺が答えよう。教室の入口にするのには重要な理由がある。教室の入り口で戦闘を行うのは、向こうの連中に戦闘を広範囲で展開されるのを防ぐ為。Dクラスと違つて弱点を突いても、元々の能力が違う、あちこちで救援を求められても対応するのが難しい。そこで、戦闘範囲を限定する。廊下と教室前だつたら明らかに戦場にしにくいのは教室前だつた

「なるほどね。教室の入り口なら戦闘は教室の前と後ろの一箇所のみになるわね」

「次に一つ目だが、Bクラスの連中は文系よりのヤツがほとんどだ。そこで、教科を数学、物理、化学主体で攻める。」

「また、島田さんの出番だね」

「そうね。前回はあまり活躍できなかつたから、今度こそがんばるわ」

「どうやら、島田は理科系が得意らしい。

「すまない坂本。俺は理科系科目が弱い。今回も本部待機になりそうだ。」

「了解した。しかし、最初の制圧戦には出でてもらいたい。構わないか？」

「ああ、魔法召喚獣だから、あまり長くはこられないがな。」

「魔法召喚獣とは何なのじや？」

「まあ、武器が魔法の召喚獣だと思つてくれれば構わない。」

「わかつたのじや。」

「おい、明久

「ん？」

「今日のテストが終わつたら、Bクラスに宣戦布告して来い」

「断る。雄一が行けばいいじやないか」

「やれやれ。それじゃジャンケンで決めないか？」

「ジャンケン？」

「OK。その代わり心理戦ありでいこう」

「いいぜ」

吉井<sup>バカ</sup>が坂本（司令官）に心理戦で勝てる訳がない。

「よし。じゃあ僕はグーを出す」

「そうか。それなら俺は、お前がグーを出さなかつたらブチ殺す」

「その発想はなかつた。

「いくぞ、ジャンケン」

「わああつ！！」

坂本がパーで吉井がグー

「決まりだ。逝つて來い」

「絶対嫌だ！それに『逝つて來い』って字が違つし、それだと僕が死ぬの確定みたいじやないか！」

「おっとすまん。行つて來い。これでいいだろ?」

「そういう問題じゃない」

「Dクラスの時みたいに殴られることを心配しているのか?」

「それもある!」

「それもある!」

「それなら今度こそ大丈夫だ。なんせBクラスは美少年好きが多いからな」

「そつか。それなら確かに大丈夫だね」

「でもお前ブサイクだし・・・・・・」

「失礼な! 365度どこからどう見ても美少年じゃないか!」

「5度多いぞ」

「実質5度じゃな」

「一周回つてどうするつもりだ。」

「みんな、嫌いだーー!」

その後当然のように吉井はボロボロになつて宣戦布告を済ませた。

## 第5問（後書き）

オリジナルのバカテストを作つてみました。  
感想くれるとうれしいです。

## 第6問（前書き）

バカテスト 化学

問題：ベンゼンの化学式を答えなさい。

姫路瑞希の答え

『C<sub>6</sub>H<sub>6</sub>』

教師のコメント

正解です。簡単でしたかね。

土屋康太の答え

「ベン+ゼン=ベンゼン」

教師のコメント

君は化学を舐めていませんか？

吉井明久の答え

『B E N Z E N』

教師のコメント

後で土屋君と一緒に職員室に来るよ!!

有明洋太郎の答え

『C<sub>6</sub>H<sub>5</sub>CH<sub>3</sub>』

教師のコメント

それはメチルベンゼンです。

## 第6問

休み時間終了のベルが鳴り響きBクラスとの試合戦争が開始される。彼らはもの凄い勢いで教室から飛び出し、戦場へ向かった。今回は最初のうちは参戦し、途中からは本部待機に回る。

渡り廊下

『いたぞ、Bクラスだ！』『高橋先生を連れているぞ』

正面から十人程度の生徒がゆっくりと歩いてくる。様子見だろう。こつちは、四十人も渡り廊下戦に投入している。ここは一気に勝負をつけて教室まで攻め込みたいところだ。

「向こうは十人程度しかいない囲んで一気に勝負を決めよう！」

『おおーっ！』

本来指揮を取るのは姫路なのだが、いかんせん運動能力が低く到着するまでは、吉井が代理で指揮をしている。

Subject: Total

Class F

Name: Yoshimune Kondo

Score: 764

VS

Class B

Name: Nagao Nonaka

Score: 1943

Subject: Math

Class F

Name: Keita Muto

Score : 69

VS

Class B

Name : Yuko Kindaiichi

Score : 169

Subject : Physics

Class F

Name : Takumi Kimijima

Score : 74

VS

Class B

Name : Mayuko Satoi

Score : 159

やはり、Dクラスとは異なり一人一人での得点差が激しい。俺も出向くとしよう。物理や数学は余り得意ではないので総合科目でいうと思う。

「試験召喚！」

Subject : Total

Class F

Name : Yotaro Arriake

Score : 2002

VS

Class B

Name : Norie Ishihara

Score : 1879

相手はBクラスでは、まずまずの点数のようだがコストとして使う点数が多いときこそ、魔法召喚獣の真価が發揮される。

「50点を消費して、クラウド」

『2002 1952』俺の召喚獣が杖を一振りすると、黒い雲が

出てきて敵の召喚獣を襲う。

『1879 883』だいたい1000点近く削れたようだ。それに加え、どうやら召喚獣は麻痺をしたらしくふらふらしている。姫路もやつてきて腕輪でBクラス生徒を蹂躪し始めた。俺はあまり点数を消費したくはないため、止めを近くにいた大下『752』と手塚『720』に任せ、本陣へと帰った。

Fクラスへと戻ったが、クラス内の光景は余りにも変わっていた。誰もいない教室。穴だらけの卓袱台に、へし折られたシャーペンと消しゴム。『教室をめちゃめちゃにしてはいけない。』なんてルールはないため問題は無いが倫理的にようしくは無いと思つ。

「酷いね。これじゃ補給がままならない」

「うむ。地味じやが、点数に影響の出る嫌がらせじやな」

「あまり気にするな。修復に時間はかかるが、作戦に大きな支障はない」

吉井と秀吉も戻つて来たらしく相談していたところに、代表たる坂本が戻つて来た。

「坂本、これは一体どういう事だ？」

「協定を結びたいという申し出があつてな。調印のために、教室を空にしていた」

「協定じやと？」

「ああ。4時までに決着がつかなかつたら、戦況をそのままにして続きは明日午前9時に持ち越し。その間、試戦にかかる一切の行為を禁止するつてな」

「それ、承諾したの？」

「そうだ」

「どうしてだ。せめて参謀の俺にくらいは相談してもよかつたはずだが」

俺の文句に吉井と秀吉も頷く。

「すまない。急を要する事態だったから戦線にたつおまえに相談出

来なかつた。とりあえずは姫路の為だと言つておこひ。今回もクラス全体と云つより姫路の個人戦力が力ギとなる以上、乗つた方が勝率が高くなる事は事実だ。いくら代表があの根本だと言つても。」

根本と言えば悪党でこの俺にも知られているほどだ。

「とりあえず、吉井と秀吉は戦線に戻つてくれ。補給は俺と坂本で何とかしておこひ。」

吉井と秀吉を戦線に返し、俺は掃除用具入れを開けて、「ミミ袋に入れてカモフラージュしておいた。筆記用具を出して置く。

「一応補給については何とかしたが、どうするか。代表？」

「いや、とにかく待ちの一手だ。お前はこのメンツのN・2だ。いなくなると護衛がヤバイことになる。」

「了解。」

こうして、戦線は膠着したまま、16時を迎えた。何とか前線はBクラスの教室前に持つていけたが、こちらもそれ相応の犠牲を払つた。なぜか吉井は本当に死にかけていたが、別にどうでもよかつたので無視した。

「坂本、どうだ。俺としてはまあまあ削れた方だと思うが……」

「そうだな。明日も姫路に頑張つてもらうより他はないな。」

「…………」

「ん？ ムツツリーー。何か変わつた事があつたか？」

「…………（コクリ）」

何か土屋が情報を持つてきたようだ。彼は今回出番が来るまで情報収集にいそしんでおり、警戒に当たつている。

「Cクラスが、試召戦争の準備を？」

「…………（コクリ）」

「狙いはAクラスじゃないだろうから……大方、漁夫の利を狙つてところか？」

「んー、そういうことならCクラスと協定でも結ぶか。俺達が勝つとも思つてないだろうし、Dクラスを使えば難しい事でもないだろ

「う

坂本がCクラスとの協定を結ぶつもりのようだが、何かが引っ掛かる。

「ちょい待ち。土屋、BクラスとCクラスが手を結んでいることは考えられるか？根本が嵌めている可能性も否めない。」

「……調べてみる。少し待ってくれ。」

しばらくして土屋が戻ってきた。

「……有明の予想通り。Bクラスの根本とCクラスの小山は付き合っている。」

「了解。坂本、Cには行くな。しかし、どうじょうか？これでは連戦になってしまい余りよろしくはない。」

「有明、その点は大丈夫だ。取つておきの策がある。」

どうやら坂本には秘策があるので、これは坂本に任せて今日のところはお開きになった。

## 第6問（後書き）

少々短いですが、これで投稿させていただきます。  
感想待つてます。

## 第7問（前書き）

バカテスト リーディング

次の問い合わせに答えなさい。

「good および bad の比較級と最上級をそれぞれ答えなさい」

姫路瑞希・有明洋太郎の答え

「good - better - best  
bad - worse - worst」

教師のコメント

その通りです。

吉井明久の答え

「good - gooder - goodest」

教師のコメント

まともな間違え方で先生驚いています。

good や bad の比較級と最上級は語尾に -er や -est をつけるだけではダメです。

覚えておきましょう。

土屋康太の答え

「bad - butter - bust」

教師のコメント

「悪い」「乳製品」「おっぱい」

## 第7問

「今から昨日言つた作戦を実行する。」

「作戦つて、Cクラス対策のか？」

「ああ、その為には、秀吉にこいつを着てもらひ。」

現在8時半、Bクラスとの戦争再開にはまだ30分ほど早い。

教壇に立ち、そう宣言した坂本は文翔学園の女子制服を取り出した。

「それは別に構わんが、ワシが女装してどうするんじや？」

そこは構うべきだ。

「秀吉には姉の木下優子になりすまして貰つてCクラスを挑発、攻撃の矛先をAクラスに向けさせる。面識がないCクラスでは見破る事は不可能だ。」

聞くところによると、姉の木下優子と弟の木下秀吉は一卵性双生児だが、パツと見では家族ですら見分けがつかない程似ている。男と女の兄弟が似ていることなど滅多に無いと思うが、常識を足蹴にしているこの学園では十分有利得ることだろう。

「と言づ訳で秀吉、用意してくれ」

「う、うむ……」

坂本から制服を受け取り、その場で着替え始める秀吉。

明久をはじめとするFクラス男子は、その着替えの光景に絶句。ムツツリーニもすゞい速さでカメラのシャッターを切り、その光景に釘付けとなる。

かくいう俺も不覚ながらここまで魅力的な『同性』の着替えを見たことはなかつた。普通同性の着替えに魅力など無いはずだが、秀吉には何かがあつた。

「よし、着替え終わつたぞい。ん？ 皆ビリした？」

「さあ？」

「……さあな？」

坂本が疑問符を浮かべ、俺は呆れたようにその面々を見ていた。

それから作戦遂行者の秀吉、作戦指揮者の坂本、隨行の俺と吉井の4人は一路にクラスへ。

ある程度まで近づいた処で、3人は身を隠す。

「…心配なのだが?」

「秀吉が大丈朱！」

秀吉なら大丈夫や 何でこたまで演劇部のホークで叫はれてるよ。それに秀吉は演技で妥協はしないはずだし。」

卷二

さて、どんな挑発をしてくれるのかなど、期待を込めて秀吉を見つめる。

深呼吸をし、表情を引き締めて、クラスの扉を開くと、まずは一

一 静かになさい、この薄汚い豚ども！」

新編人情小説

吉井が優等生とは遙かに異なるような喋り方に

「な、なによアンタ！」

一話しかけないで！  
アタ臭いわ！！

自分が詰しかけておいて、それはないが至

になるんじゃないわよ！ 何の罪よ！ 一

「私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢なら

「うつへいとくは、アラバダム人合ハボウ

1

Fクラス"豚小屋なのだろうか?ぎりぎり豚小屋よりはマシだと思つてゐるが……

「手が汚れてしまつから本当は嫌だけど、特別に今回は貴女達を相応しい教室に送つてあげようかと思うの。ちょうど試験戦争の準備もしている様だし、覚悟しておきなさい。近いうちに、私達が薄汚いブタの貴女達を始末してあげるから！」

そう言い残し、靴音を立てながら秀吉はCクラスの教室を出ていく。それと同時に、Cクラスから小山代表のヒステリックな声が響き渡る。

「これで良かつたかのう？」

「ああ、最高だ。」

坂本が褒めたたえる。

「Fクラスなんて相手にしてられないわ！ Aクラス戦の準備を始めるわよ！」

そして、見事に小山は引っ掛けかり戦争の矛先をAクラスへと変えた。「上手くいったな。流石は根本の彼女、ヒステリックな事で

「ある意味お似合いかもね」

吉井と坂本はうんうんと、寸分違わず頷いた。

4人は一路、Fクラスへ。

「俺と坂本は本部待機だから……司令に姫路、補佐に秀吉がついてくれ。」

「うむ。承知した。」

そして、9時ちょうど。BクラスVS Fクラス戦再開

「ドアと壁をうまく使うんじゃ！ 戰線を拡大させるでないぞ！！」

今回も理系科目をメインに戦うので俺は坂本と共に本部待機になつている。今日は正念場であるため土屋が持つていたトランシーバーを姫路と秀吉に持たせ、本部との指示のタイムラグを無くそうとしている。

秀吉の指示がよく通っている、しかしながら疑問点があった。秀吉の声がよく通っている、それすなわち姫路が指示をしていないのではないか？それもあってかどうも決め手に欠けた感じがある。

すると、いきなり吉井一人だけが本部にFクラス教室に入つて來た。

「雄二つ！有明君！」

「うん？どうした明久。脱走か？チヨキでシバくぞ」

「吉井、なんで一人で戻ってきた？」

「話があるんだ。」

「……とりあえず、聞こつか」

吉井は何時になく真剣で坂本もそれを察したのか真面目な表情で吉井の方を見る。吉井も真面目な表情で坂本に顔を向ける。「根本君の着ている制服が欲しいんだ？」

「……お前に何があつたんだ？」

「なあ坂本。俺がコイツをチヨキでシバいていいか？」

今のは結構本気だ。何があつて根本の制服が欲しいのだろう？プレミアなんてないぞ。

「ああ、いや、その。えーっと……」

「まあいいだろう。勝利の曉にはそれぐらいなんとかしてやるう。」

吉井のカミングアウトとも取れる発言に対し坂本は何とか受け入れた。坂本は吉井がその手の趣味に目覚めても不思議ではないと思っているのだろうか？

「それと、姫路さんを今回の戦闘から外して欲しい」

いきなり、吉井がとんでもない事を言つ。この戦争の作戦の根幹を覆すような内容だ。坂本はそれに構わず吉井に聞き返す。

「理由は？」

「理由は言えない。」

しかし吉井は理由を言わない。

「どうしても外さないとダメなのか？」

「うん。どうしても、」

「おい、吉井。何で理由が言えないんだ。」

「えつーと…」

緊急事態にもほどがある。

「しかたない、坂本。俺が直接行つて確認を取りたい。指示はそれからだろう。構わなか?」

「ああ、行つてくれ。」

吉井が絶望したような顔をしているが関係ない。姫路を理由なく外すなどあつてはならないからだ。そのくらい姫路の価値は高いものがある。

「吉井、案内しろ。」

「あ、うん。」

### Bクラス教室前

Bクラスの教室前にほっこりが正念場だと両クラス入り乱れての戦闘になつてているのだが、姫路の様子が明らかにおかしい。今にも泣きそうだ。そんなことをしてる間にも古典の場がピンチに立たされた。

「姫路!何をしている。やつと古典に向かえ!」

しかしながら、姫路はおどおどとして、一向に行かない。

「ひ、め、じ!さつと行け!」

もう一度呼んでも姫路は向かおうとしない。

「ああ、もう!俺が出る!試験!」

Subject:Classics

Class F

Name:Youtarо Ariake

Score:195

VS

Class B

Name:Keiichi Harada

Score : 156

Class B

Name : Yurui Kitō

Score : 121

Bクラス2人は流石に骨が折れる。

「25点を消費して、ワイドショット」

『195 170』ワイドショットは貫通しないため一撃では倒しにくいものの対複数では消費点数の割にいい仕事をする。

『156 44・121 30』

「更に15点を消費してメインボム」

『170 155』原と紀藤の召喚獣が前進して、俺の召喚獣に向かうも、原の召喚獣が地雷を踏んでしまい爆風で紀藤のを巻き込み、戦死に追いやつた。

「まだ、Bクラス大野がFクラス有明『少々席を外します。』……ちつ。

吉井の機転でMr・竹中が一時的に戦場から離れた。その隙に俺は、姫路の所に向かった。

「おい、姫路。何をやっているんだ。」

「えっと……あの……」

「早く戦線に復帰してくれ！これじゃあ戦争に勝てない！」

「有明君、そのくらいにしてあげなよ。」

「黙れ吉井。俺は今姫路と話をしている。姫路、参謀総長からの命令だ。早く戦線に復帰しろ。」

「うう……」

姫路は涙ぐみ、なかなか戦線に復帰しない。

そんな姫路に俺は……

『一時的に吉井の視点になります。』

有明君が姫路さんに対し、早く戦場に戻るよう言っている。でも、姫路さんは行かない、いや行けないんだよ。根本のヤローに姫路さんのラブレターを取られて、いるからだ。気付いてあげなよ、有明君！

あまりにうずくまっている姫路さんに憐れをきたしたのか、有明君は姫路さんを……

思いつきり平手でほっぺをはたいた。

その瞬間、姫路さんは泣きながらどこかに行ってしまった。そして、俺は吉井につかみ掛かっていた。

### 『吉井視点終り』

平手ではたいた後、姫路はどうかに行ってしまった。そして、俺は吉井につかみ掛かっていた。

「貴様、姫路さん有何をした！」

「何をしたって、戦場に立てるかを確認しただけだ。」

「はたかなくたっていいじゃないか！姫路さん、泣いていたぞ。」

「泣こうが喚こうが知ったこっちゃない。今使えるかどうかが大事なんだ。」

また、吉井がフェミニニストっぷりを發揮している。

「邪魔だ。戦線に戻れ。それと坂本に連絡をする。姫路が本当に使えないくなつたと」

「なにを！姫路さんは姫路さんは、ラブレターを根本のやつに取られてて、それで動けなかつたんだぞ！」

… その程度の事かよ。

「ここは、戦場だ。こんなときに個人の都合など知つたことではない。」

吉井が人で無しを見るような目をしているが、構わず坂本に連絡を

する。

「坂本、姫路が本当に使えなくなつた。」

「なんだと。」

「まあ、無い物ねだりをしても仕方がない。作戦を変更したいがいいか?」

「ああ」

「今から1時間と採点時間の分何としても時間を稼いでくれ。ちょっと本気でテストを行う。」

「何で今まで本気じゃなかつた。」

坂本の声に怒氣が含まれるが冷静にこう言った。

「Aクラス戦用の秘策にするつもりだったが、本當になりふり構つてられなくなつた。日本史の先生を用意してくれ。」

「ああ、わかつた。それと吉井に代わってくれ。」

俺はトランシーバーを吉井に渡し、速やかに本陣に戻つた。吉井もなぜか、トランシーバーを聞き終えると教室の方へとむかつたが、俺は自分のやるべき事をするために気にしなかつた。

#### Fクラス教室

代表さえ出払つた教室で一人回復試験を受ける。いつもなら適当なところ まあ400点ちょい上あたり で切り上げるのだが今回はそうもいつてられない。でかい魔法を使うためにはより沢山の得点が必要になるからだ。だから、今回は最後の1秒まで書き続ける。すまないが、耐えてくれよ!

#### Bクラス教室前

##### 《坂本視点》

現在の時刻は午後2時55分。作戦A開始まであと3分。作戦Y開始まであと5分。Dクラスに指示を出した後、俺達はBクラス教室前に集まり根本と対峙していた。

「お前らしい加減諦めろよな。昨日から教室の出入口に集まりや

がつて暑苦しこじの上なつての」

ドンシドンシ

根本が俺達を挑発するよつに嘲笑ひ。

「どうした？軟弱なBクラス代表サマと腰巾着をんはそろそろギブアップか？」

俺は挑発に乗ることなく言い返す。姫路が戦線から外れた為、また、有明の策を成功させるためにも本隊も総動員することになったのだ。

「はア？ギブアップするのはそつちだろ？」

「無用な心配だな」

「せうか？頼みの綱の姫路も調子が悪そうだぜ？」

「お前らじや役不足だからな。今日のところは休んでもらひことにした。」

ドンシドンシ

「せつきからドンドンと、壁がつるせえな。何かやつているのか？」

「さあな。人望のないお前に對しての嫌がらせじゃないのか？」

「けつ。言つてみどりせもうすぐ決着だ。お前ひ、一気に押し出せ！」

その瞬間だった。俺の携帯に帝国のマーチが流れた。作戦A決行だ！

「……態勢を立て直す！一旦下がるぞ！」

指示に従い本隊が一斉に後退する。

「どうした、散々ふかしておきながら逃げるのか！」

Bクラスは尚も前進する。かかった！

「Fクラス参謀総長有明洋太郎、今前進している奴ら全員に日本史勝負を仕掛ける。試獣召喚！」

Name : Youtarō Ariake

Score : 561

VS

Class B

Name : Shinji Ooki

Score : 175

Class B

Name : Mariko Nakamura

Score : 182

Class B

Name : Yuko Sanada

Score : 155

Class B

Name : Saburo Yanagisawa Score : 166

Class B

Name : Shingo Kurotaki

Score : 174

Class B

Name : Chinami Nishikino Score : 149

おいおい、561点なんて、翔子の点数でもお皿にかかるないぜ。なんつー隠し玉を持ちやがってたんだよ。でも、驚くのはまだ早かつた。

「200点を消費して、メテオ。」

『561 361』有明の召喚獣の杖がピカピカ光つたら、いきなり隕石が山のように落っこちてきた。

これじゃあ明久はともかく普通の奴なら避け切れずにペシャンこだらう。案の定、何も抵抗出来ずにBクラスの召喚獣が死んでゆく。「まだだ！ 加西・鈴木・岡田。有明を止めろ！」

根本のヤローが近衛部隊の一部を割いて有明を倒すようにまわして

るが無駄な事だろ。

Subject : Japanese History

Class F

Name : Youtarō Ariake

Score : 361

VS

Class B

Name : Shin'ichirō Kasai

Score : 192

Class B

Name : Miwako Suzuki

Score : 177

Class B

Name : Atsuya Okada

Score : 163

「Jのまま有明でJに押しでも良いんだが、ちょっと明久に花を持たせてやろう。

「有明、時間稼ぎに専念してくれ！」

「了解、40点を消費して武器化：ガドリング」  
ウエポンライズ

『361 321』今度は木の杖が変化して鉄砲になつた。有明は指示を守り細かく点数を削りながら、絶対に自分の召喚獣に近寄らせないようにしていた。

時刻は3時ちょうど、Dクラスとの壁が破れ島田と明久が根本に攻め掛かるが近衛部隊の残りに止められた。だがこれで十分。根本には守るやつがない。そして……

「……Fクラス、土屋康太」

「キ、キサマ」

ムツツリーニと保健体育の教師、大島先生だ。保健体育の教師は常軌を逸した行動力をもつ。上の階から窓の中へと入るなんて保健体育の教師しか出来ない。

「……Bクラス根本恭二に保健体育を申し込む  
「ムツツリイニイーーッ！！」

「……試験召喚」

Subject : P . E .

Class F

Name : Kouta Tsuchiya

Score : 441

VS

Class B

Name : Kyoushi Nemoto

Score : 204

ムツツリーニの小太刀が根本の召喚獣を一刀両断して、俺達の勝利が決まった。

## 第7問（後書き）

始めにお詫びをば。

姫路さんをひっぱたいてしゃってすいません。しかし、ビービーしてもや  
りたかったのです。

戦争中の兵隊、ましてや主力が私事で任務を放棄するなどあつては  
ならないことかど。

洋太郎はそれこそ、男だから・女だからといった思想は持ち合わせ  
ていません。

出来るやつが出来ることをやる。姫路さんは出来るのにやらないか  
ら洋太郎は怒ったのを理解してください。

帝国のマーチ やる気のない（残念な）ダースベイダーのテーマの  
こと。栗コーダーカルテットの有名な曲です。

感想待つてます。

## 第8問（前書き）

バカテスト

保健体育

問題：（ ）の中を満たしなさい。

『女性は（ ）を迎える事で第一次成長期になり、特有の体付きになり始める』

姫路瑞希の答え

「初潮」

教師のコメント

正解です。

有明洋太郎の答え

「初経」

教師のコメント

これも正解です。

吉井明久の答え

「明日」

教師のコメント

随分と急な話ですね。

土屋康太の答え

「初潮と呼ばれる生まれて初めての生理。医学用語では、生理の事を月経、初潮の事を初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が43kgに達する頃に初潮を見るものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均12歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境栄養状態などに影響される」

教師のコメント

詳しく述べです。

## 第8問

「明久、随分と思い切った行動にでたの?」

戦後、Bクラスにやつてきた秀吉は吉井にそんな事を言った。

「う……。痛いよう、痛いよ……」

「当たり前だろ、吉井。素手でコンクリートの壁壊したんだからな、痛みが100%跳ね返るわけじやないことは言え、そりゃ痛いだろ?」

「なんともお主らしい作戦じゃつたな」

「で、でしょ? もつと褒めてもいいと思つよ?」

「後のことを何も考えず、自分の立場を追い詰める、男氣溢れる素晴らしい作戦じやな」

「……遠まわしに馬鹿つて言つてない?」

「いや、かなりわかりやすく馬鹿つて言つてると思つた」

「あんまりだつ!」

「有明よ。あまり明久を泣かせるようなことを言つでない」

「先に言つたのはあんただからな。オブラーートに包みや良いつてもんじやないだろ。まあ、とりあえずこれで吉井の放課後は職員室行き決定だな。」

「「」愁傷様じやのう……」

「ま、それが明久の強みだからな」

「雄二が明久の肩を叩く。それについては俺も同意だ。

「坂本。それにしても、よくこんな隠し玉用意していたな。俺にも内緒で。」

「まあな。さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組代表?」

「……」

床に座り込み黙り込んでいる根本。

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵な卓袱台をア

レゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない「

そんな坂本の発言に、周囲の連中が騒ぎ出す。

「落ち着け、お前ら。最初に坂本が言つてただろう。俺達の目標はAクラスだ。Bクラスを手に入れる必要はない。」

俺の言葉に坂本が続く。

「ここはあくまで通過地點だ。だから、Bクラスが条件を呑めば解放してやろうかと思つ。」

その言葉でFクラスの連中は納得したような表情になる。Dクラス戦のときにも言つた事だし、坂本の性格を理解してきたのだろ。う。

「……条件は何だ。」

根本が力なく問う。

「条件？それはお前だよ、負け組代表さん。」

「俺、だと？」

根本が疑問に思う。それは当然だ。俺が根本でもそう思つ。

「ああ。お前には散々好き勝手やつてもらつたし、正直去年から田障りだつたんだよな。」

坂本は根本の痛いところをつくが、周りの人間は誰もフォローしない。本人もわかつてるみたいだ。

「そこで、お前らBクラスに特別チャンスだ。Aクラスに言つて、試召戦争の準備ができるいると宣言して来い。そうすれば今回は設備については見逃してやつてもいい。ただし、宣戦布告するな。すると戦争は避けられにからな。あくまでも戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ」

「……それだけでいいのか？」

疑うような根本の視線。当初の計画ではそれだけのはずだったが。

「ああ。Bクラス代表がコレを着ていったとおりにしたら見逃そう」そう言つて坂本が取り出したのは、朝に秀吉が来ていた制服。これは吉井が制服を手に入れるための手段だ。

「ば、馬鹿なことを言つな！」の俺がそんなふざけたことを……。」

根本が慌てふためく。

「Bクラス生徒全員で必ず実行させよ!」

「任せて、必ずやらせるから!」

「それだけで教室を守れるなら、やらない手ないな!」

……Bクラス生徒達の思わぬ裏切り。いや、案外こうなるんじゅないかと結構思つていた。

「んじや、決定だな」

「くつ！よ、寄るな！変態ぐふうつ！」

「とりあえず黙らせました」

「お、おづ。ありがとう」

一瞬で代表を見限つて腹部に拳を打ち込んだBクラスの男子。流石の坂本も驚いてるようだ。

「では、着付けに移るとするか。明久、任せたぞ」

「了解っ」

明久が倒れている根本に近づき、制服を脱がせる。その表情は当然、気持ち良さそうな顔ではない。

「う、うう……」

うめき声をあげる根本。

「ていつ！」

「がふつ！」

そこに吉井の追加攻撃。

その後男子の制服を剥ぎ、女子の制服をあてがうが、やり方がわからぬようだ。分かる秀吉がおかしいと思つ。

「私がやってあげるよ。」

Bクラスの女子がそう提案する。

「そう？悪いね。それじゃ、折角だし可愛くしてあげて。」

「それは無理。土台が腐ってるから。」

「じゃ、よろしく

吉井はそう言い、根本の制服を持ってその場を離れた。姫路のラブレターとやらを回収するのだろう。それは置いといて根本の着替えを始める。

まあ、そんなに誰得な根本の着替えも終わり…

「いいからキリキリ歩け！」

「さ、坂本め！よくも俺にこんなことをー！」

「無駄口を叩くな！これから撮影会もあるから時間がないんだぞ！」

「き、聞いてないぞ！」

いつの間にか撮影会までスケジュールに入っていた。これからの出来事は根本には一生忘れないトラウマになるに違いない。

Bクラス戦が終結してから一日後、俺達は点数補給のテストを終えた日の朝、全てのテストの得点を回復しきり、俺もBクラス戦からの隠し玉、歴史教科も本気の点数に上げた。残すAクラス戦についての説明会を受けていた。

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があつてのことだ。感謝している。」

壇上の坂本が珍しく素直に礼を言つ。

「ゆ、雄一、どうしたのさ。らしくないよ？」

「一年の時からのダチの吉井が言つて事は本当に珍しいみたいだな。本当にどうしたんだ？」

「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」  
その様子から察するにこれが本音で間違いないようだ。

「ここまで来た以上、絶対Aクラスにも勝ちたい。勝つて、生き残るには勉強すればいいってもんじやないという現実を、教師どもに突きつけるんだ！」

『おおーっ！』

坂本の鬨の声に皆が答える。かく言つ俺も叫んだ。

「皆ありがとうございます。そして残るAクラス戦だが、これは一騎討ちで決着をつけたいと考えている」

俺を始めとした先日の昼食時にいたメンバーは既に聞いた話だったので驚かなかつたがそれ以外の連中はかなり驚いており、教室中にざわめきが広がった。

「そして、やるのは当然俺と翔子だ。」

Aクラス代表の霧島翔子とFクラス代表の坂本雄一。クラス間の戦争を代理で行うのだから、代表同士の一騎打ちは当然だ。しかし、坂本がどうやって勝つかが問題だ。相手は学園主席の霧島翔子だ。俺は奴と一年の時同じクラスだったが、その学力は俺や姫路でも、明らかに差をつけられている。俺がそんな事を考えていると、

「馬鹿の雄一が勝てるわけがないああっ！？」

「うおっ！？」

余計な事を口にした吉井の頬を、カッターがかすめる。坂本は友達を本気で殺すつもりなのか？

「次は耳だ。」

どうやら、吉井は友達と思われてないらしい。

「残念ながら、事実だろ。ちゃんと説明しろ。」

「そう、せかすな。確かに翔子は強い。まともにやりあえば勝ち目はないかもしねえ。」

さつきカッターを投げた男はあっさりと事実を認めた。

「だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだつたらうつ？・まともにやりあえれば俺達に勝ち目はなかつた。」

そんな俺達は、二連勝。

「俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を皆に見せてやる」

「おおお―――っ――！」

全員の意思を確認するまでもなく坂本を信じているようだった。

「さて、具体的なやり方だが……一騎打ちはフィールドを限定する

つもりだ。」「

「フィールド? 何の教科でやるつもりじゃ?」

「日本史だ。」

「霧島は日本史もかなりできるし、坂本が得意って訳でもないよな? 一体日本史でどうする気だ?」

「内容を限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり、召喚獣勝負ではなく純粋な点数勝負だ。」

「なるほど、その条件だと、満点が前提になつて、ミスした方が負けになるから注意力勝負になるな。確かに召喚獣勝負よりかは勝ち目はあるが……」

「でも、同点だつたら、さつと延長戦だよ? そうしたら問題のレベルも上げられちゃうだらうし、ブランクのある雄二には厳しくない?」

「確かに明久の言つとおりじゃ」

俺が言おうとした事を吉井が先に言い、木下がそれを肯定する。「おいおい、あまり俺を舐めるなよ? いくらなんでも、そこまで運に頼り切つたやり方を作戦などというものか。」

当たり前だ。そんなのは作戦ではなくギャンブルだ。

「?? それなら、霧島さんの集中力を乱す方法を知つてるとか?」

「いいや。アイツなら集中してなくとも、小学生レベルのテストなら何の問題もないだろ?」

そもそもそうだ。

「雄二。あまりもつたいぶるでない。そろそろネタを明かしてもいいじゃろう?」

クラスの連中も木下の言葉に頷く。俺も色々考えて見るが、坂本が何を考えているのか見当がつかない。

「俺がこのやり方を探つた理由は一つ。ある問題が出れば、アイツは必ず間違えると知つているからだ。」

ある問題?

「その問題は――『大化の革新』」

中大兄皇子が645年に発布した政治的改革だ。無事故の改新なり、蘇我氏は虫殺しなりで覚える。

「大化の改新？誰が何をしたのか説明しろ、とか？そんなの小学生レベルの問題で出てくるかな？」

吉井が坂本に問う。

「そんな掘り下げた問題じゃない。もつと単純な問いただ。」

「単純というと一何年に起きた、とかかのう？」

「おつビンゴだ秀吉。お前の言うとおり、その年号を問う問題が出たら、俺達の勝ちだ。」

そんな基礎的な問題を、霧島が間違えるのか？そもそも何で坂本はそんな事を知っている？というか、さつきから霧島を親しい奴みたいな呼び方をしている。別にそれは問題ではないが。

「大化の改新が起きたのは、645年。こんな簡単な問題は明久ですら間違えない。」

気になつたので吉井の方を向くと何故か顔を逸らす。どうやら小学生レベルのこれもわからなかつたらしい。流石だ。

「だが、翔子は間違える。これは確実だ。そうしたら俺達の勝ち。晴れてこの教室ともおさらばだ

」

「あの、坂本君」

「ん？なんだ姫路」

「霧島さんとはその……仲が良いんですね？」

俺も思つていたこと（多分みんなが思つていたこと）を姫路が聞く。

「ああ。アイツとは幼馴染だ」

「総員、狙ええ！」

吉井が坂本に牙を向いた！？日頃の恨みか？

「なつ！？なぜ明久の号令で皆が急に上履きを構える！？」

「黙れ男の敵！Aクラスの前に貴様を殺す！」

「俺が一体何をしたと！？」

坂本の言葉に耳を傾ける事無く吉井は坂本に殺意を向ける。

「遺言はそれだけか？……待つんだ須川君。靴下はまだ早い。それは押さえつけた後で口に押し込むんだ

「了解です隊長」

なかなかえげつない。ていうか、なんつー嫌らしい統率力だ。

「あの、吉井君」

「ん？ 姫路さん。何？」

「吉井君が霧島さんが好みなんですか？」

「そりや、まあ、美人だし」

「……」

ん？島田はともかく姫路からも殺氣が漂うぞ。『気のせい』か……って姫路はこんなキャラじやないはずだよな？

「え？ なんで姫路さんは僕に向かつて攻撃態勢を取るの！？ それと美波、どうして君は僕に向かつて教卓なんて危険な物を投げようとしているの！？」

これはかなりヤバイ。このままではAクラスと戦う前にFクラス内で内戦が勃発し同士討ちをおつぱじめる事になる。（死ぬのは主に吉井と坂本だが）

吉井はともかく坂本が死んだら戦争どいうじやない。

「おいおい。お前らしい加減に落ち着けって」

「有明の言つとおりじや、皆一回座るのじや」

冷静な態度で俺がクラス全員に注意すると、木下も他の連中を宥めてくれる。

「む。有明君と秀吉は雄二が憎くないの？」

「別に今考える事じやない。まずは戦争をどつするかだ。」

「それに冷静になつて考えて見るがよい。相手はあるの霧島じやぞ？ 男である雄二に興味があるとは思えんじやろつが」

霧島は告白を全て反古にしているため同性愛者の疑いがまことしかに流れている。そうなると、興味があるとすれば……全員の視線が姫路に集まる。

「な、なんですか？ もしかして私、何かしました？」

姫路は特に何もしてない。ただ、霧島は去年から男には興味がない同性愛者で今は姫路を狙っているという噂が流れているだけだ。まあ、所詮はただの噂に過ぎないが。

「とにかく、俺と翔子は幼馴染で、小さな頃に間違えて嘘を教えたんだ。アイツは一度覚えた事は忘れないほど頭が良い、でも今回はそれが仇になる。俺はそれを利用してアイツに勝つ。そうしたら俺達の机はー」

『システムデスクだ！』

おもしろいなあ、代表の考えは！

## 第8問（後書き）

感想を待っています！

## 第9問（前書き）

バカテスト 生物

問題：以下の問いに答えなさい

『人が生きていく上で必要となる5大栄養素をすべて書きなさい。』

姫路瑞希の答え

「1・脂質 2・炭水化物 3・たんぱく質 4・ビタミン 5・ミネラル」

教師のコメント

流石は姫路さん。優秀ですね。

有明洋太郎の答え

「1・炭水化物 2・タンパク質 3・脂質 4・ビタミン 5・無機質」

教師のコメント

正解です。ミネラルのことを無機質あるいは無機塩類とも呼びます。

吉井明久の答え

「1・砂糖 2・塩 3・水道水 4・雨水 5・湧水」

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです。

土屋康太の答え

「初潮年齢が十歳未満の時は早発月経という。また、十五歳になつても初潮がない時を遅発月経、更に十八歳になつても所長がない時を原発性無月経といい……」

教師のコメント

保健体育のテストは一時間前に終わりました。

## 第9問

全く面白過ぎる。

「ハハハハハ……おかしい、おかしいよ。」

臍で茶が沸くくらいにね。

「何がおかしいんだい？」

吉井が俺の爆笑の理由を尋ねる。

「おまえら、ちょっとは考えろや。この作戦にはよー、落とし穴が、いや落とし穴だらけだつてことだよ。」

『えつ……まじかよ？』

クラスメートが動搖している。

「んだと……言つてみろよ。」

坂本の口調が変わった。

「始めて聞いておくが他に霧島に間違えた事を教えてないよな。」

「ああ。それがどうした。」

「んじゃあ……眞面目に答えろよ。本番の模擬演習だ。江戸の三大改革の元号は？」

「享保・天明・天保」

「坂本君、それは江戸の三大飢饉の元号ですよ。三大改革は天明じやなくて寛政です。」

思つたとおりに坂本は間違えた。当然姫路は正解。

「じゃあ、『この世をば』から始まる望月の歌の作者は？」

「菅原道真」

「藤原道長だ。これでもう2問間違えた。お前の負けだよ。」

「しかし、洋太郎よ。これは出来過ぎではないだろうか？洋太郎の問題に雄二がたまたま間違えただけかもしれないし、この問題はないかも知れないぞ。」

秀吉がなおも突っ掛かる。

「出るかもしねいぞ。そもそも霧島に坂本は1つだけしか間違え

た物を教えていない。つまり坂本は勝つためには全問正解するよりほかはない。でも坂本は今の2問を間違えた。それも俺が適当に考えたやつをだ。そんなやつにFクラスの明暗を任せられるか？」

「う、うむ。」

秀吉がどもる。

「なあ、姫路。小学生レベルの日本史とは言え、こいつでもビリでもどんな状況でも『満点』をとれるか？」

「えへへ……ちょっと、厳しいです。いつでもうてなると……」

「学年次席で押しも押されぬ才媛、姫路瑞希でやえこいつに付つてる。多分俺でもキツイ。ましてやかつての『神童』とはいえ『Fクラス』の坂本じゃあ今からやつても無理だ。」

坂本はぐうの音も出さずに苦々しい顔をしている。

「それじゃあ、どうすればいいのよ？…まさかウチらにAクラスと試合戦争をやれっていつの？」

島田の疑問にみんなが頷く。

「それはない。それじゃあホントに勝つ可能性が〇だ。1対1じゃなくて団体戦にすりやいいんだ。」

ここでのプランを発表する。

「しかし、これには宣戦布告時の交渉力がまず第一にカギになる。今まで通り吉井に行かせるなんて愚行は出来ない。」

吉井がぶーぶー言つているが気にせずに続ける。

「その後は、何対何かによつて代わつてくるが、絶対に7対7以上にはするな。そのぐらいなら坂本でもわかるよな。」

「ああ、お前はこっちの勝ち星を姫路・ムツツリーーの保健体育・お前の歴史の3つで考えている。7対7以上だとビリしても勝つために4勝しなきやならない。だろ？」

「That's right. それと、万が一同点になつたときは、サドンデスでは無く、その時にあらためて交渉つて事にしてくれ？」

「それがなんなのよ？」

「まあ、保険だと思つてくれ。それと、俺は宣戦布告にはいかないぞ。姫路瑞希はFクラスのエースで普通ならAクラスにいないとおかしいレベルだから、Aのやつもわかるはずだが、俺は上手く行けばばれないかもしね。それと、万が一の保険を作つておきたい。」

「わかった。今回は全面的にお前の策に乗つかり。有明、勝てるよな？」

「余程のイレギュラーが無ければな。」

「まあ、そうだな。おまえらー！今度こそ大丈夫だ。俺達の机は…

『システムデスクだ！』…よろしい。じゃあ、行つてくる姫路に明久、ムツツリーに秀吉と島田は一緒に来てくれ。』  
さて、もう一つ仕込んでおこうかな。

『IJOからは坂本視点です。』

「一騎討ち？」

「ああFクラスは試召戦争として、Aクラスに一騎討ちを申し込む。」

恒例の宣戦布告だ。今回は代表の俺を筆頭に、明久、島田、秀吉、土屋、それに姫路と首脳陣を揃えて（参謀総長欠席中）Aクラスに来ていた。

「一体何が狙いなの？」

交渉のテーブルについているのは木下の双子の姉の木下優子だ。

「もちろん俺達Fクラスの勝利が狙いだ。」

警戒するのも無理はない。下位クラスの俺達が一騎討ちで学園トップの霧島に挑む事自体、不自然なのだし何か裏があると思つてingるだろう。当然だ。

「Fクラスとの面倒な試召戦争を手軽に終わらせる事が出来るのはありがたいけどね、だからと言つてわざわざリスクを冒す必要もない

いわ。

「賢明だな。」

「こまでは予想通り。ここからが本番だ。

「ところで、Cクラスとの試戦はどうだつた？」

「時間は取られたけど、それだけよ？何の問題もなし。」

秀吉の挑発に乗り、昨日Aクラスを攻めたCクラス。決着は半日でつき、Cクラスの設備はDクラスと同じになつた。

「Bクラスとやりあう気はあるか？」

「Bクラスつて……昨日来てたあの……」

「ああ。アレが代表がやつてるクラスだ。幸い宣戦布告はまだされていないようだが、さてさて。どうなることやら……」

「でも、BクラスはFクラスと戦争をしたから、3ヶ月の準備期間を取らない限り試戦戦争はできないはずよね？」

これは試戦戦争のルールの1つ。戦争に負けたクラスは3ヶ月の間、自分から宣戦布告できない。これは負けたクラスがすぐに再戦を申し込んで、戦争が泥沼化しない為の取り決めだ。

「知ってるだろ？実情はどうあれ、対外的にはあの戦争は『和平交渉にて終結』という形になつてる。規約にはなんの問題もない。……そしてDクラスもだ。」

「……それは脅迫かしら？」

「人聞きが悪い。ただのお願いだよ」

「今の雄二つてなんか根本君みたいだね……」

「まあまあ、明久よ。今は静かにしておれ。」

うるせえ、黙つてみていろ明久。

「まあいいわ。何を企んでるか知らないけど、代表がFクラスのバ力に負けるなんてありえないし、その提案受けてあげるわ。」

「え？本当？」

会話に参加しない明久<sup>バカ</sup>が声をあげる。

「あんな格好した代表のいるクラスと戦争なんて嫌なのよ。」

昨日。根本は女子の制服を着て話をしに来た。そのおかげで提案があつたり通るとは。イレギュラーな収穫だ。

「でも、こちらから提案。代表同士の一騎討ちじゃなくて、そうね、お互い5人ずつ選んで、一騎討ち5回で先に3勝した方の勝ち、この提案なら受けていいわ。」

やはり警戒心は緩んでいない。

「なるほど。姫路が出てくる可能性を警戒してるんだな？」

「多分大丈夫だと思うけど、代表が調子悪くて姫路さん、それと『有明君』が絶好調だつたら、問題次第では万が一があるかもしれませんいからね。」

「ん、なんで有明の事を知つてやがる？ そつ思つたが、俺はポーカーフェイスを貫いたが、

「えつ？ 何で有明君のこと……」

また明久（？）がやつてくれた。『ノノヤロー、やはりバカは連れていくんじやなかつた。』

「後ろの子の疑問に答えましょつか。実はね、近所の女の子からの情報よ。」

「近所の」

「……女の子」

「「（……）有明洋太郎、許すまじ」」

いかん、明久とムツツリー二がFFF團化している。人の恋愛には死の鉄槌を与えるのだが、今そうなつてもらつちや困る！

幸い、秀吉と島田が抑えててくれているが、時間の問題だ。少し急ごうか。

「安心してくれ。うちからは俺が出る」

「無理ね。その言葉を鵜呑みにはできないわ、これは競争じやなくて戦争なのよ」

「そつか。それなら、その条件を呑んでも良い。」

よし、まずは第一段階突破だ。5対5なら勝ち目がある。

「あら、話がわかるじやない。」

「けど、勝負する内容はこちらで決めさせて貰う。そのくらいのハントはあつてもいいはずだ。」ここが大事なところだ。、科目選択権は俺達にとって重要だ。ムツツリーーは言つに及ばず、有明の得点も日本史・世界史以外は良くてBクラス、ひどいものはFクラス相当のものだつてある。一騎討ちの上に科目も選ばせりなんて、言つてる俺が言うのも難だが、話は流石に虫が良すぎる。

「……」

黙り込んで悩む木下姉。クラスを代表して交渉して立場ゆえか、安易な判断が出来ないのは当然だ。

「…………受けてもいい。」「うわっ！」

例のバカが情けない声を出す。

「…………雄二の提案を受けてもいい。」

いきなり現れた静かな声をだした人物、翔子だ。  
「代表…………いいの？」

「…………その代わり、条件がある。」「条件？」

「…………うん。」

霧島は頷いて俺を見た。その後、姫路をゆっくりと観察した。再度俺に顔を向けて言い放つ。

「…………負けたほうは何でも一つ言つ事を聞く。」

「…………（力チャヤ力チャヤ）」

「ムツツリーー、まだ撮影の準備は早いよ！というか、負ける気満々じゃないか！まさかこれも計算の内なんじゃ、流石は学年代表だ。恐ろしい」

こいつらを連れて來た俺がバカだつた。反省しよう。

「なら、こうしましょう。勝負内容はFクラスが3つ、Aクラスが2つ決める。これでどう？」

木下姉の妥協案が得られた。正直ぎりぎりだが、姫路にならAクラ

ス相手でも引けをとらないし、嬉しいことに全科目で満遍なく高得点をとるタイプだ。

となりでは明久と姫路が小声で何か話してるがあまりたいした内容ではなさそうなので気にしない。

「交渉成立だな。」

「ゆ、雄二！何を勝手に…まだ姫路さんが了承してないじゃないか。」

「明久。何を想像してるか知らんが少し落ち着け。」

俺は明久を宥める。

「心配すんな。姫路に迷惑はかけない。」

翔子の狙いは分かっている。

「……勝負はいつ？」

「そうだな。十時からでいいか？」

「……わかった」

「よし。交渉成立だ。一旦教室に戻るぞ。」

交渉を終了し、Aクラスをあとにする。あとは十時まで待つだけだ。俺はやるべき事を全てやりのけた。

有明、頼むぞ。

## 第9問（後書き）

感想を待っています。  
じゃんじゃん送ってください。

## 第10問（前書き）

バカテスト　日本史

問題：太平洋戦争初期に大活躍をした日本の代表的な戦闘機をこ  
れが出来た年が皇紀2600年であることから、何と言つでしょ？

有明洋太郎の答え

「零式艦上戦闘機」

教師のコメント

正解です。皇紀2600年の史実も知っているのは流石ですね。

島田美波の答え

「メッサーシュミット」

教師のコメント

それは、第一次世界大戦時に活躍したドイツの戦闘機です。日本の  
ものもしっかり覚えましょう。

吉井明久の答え

ゼロの使い魔

教師のコメント

いろいろと関係ないはずなのにゼロだけ合っているのが腹立たしい  
です。

## 第10問

「では、両者共準備は良いですか？」

立会人を務めるのはAクラスの担任で学年主任のMs・高橋、通称

『高橋女史』

「ああ

「……問題ない」

一騎討ちの会場はAクラス。FクラスがAクラスに挑戦するのにFクラスでは見映えがないということだ。俺達にとっちゃアウェーだ。まあ、これにはもう一つ理由があるのだが…

「それでは一人目の方、どうぞ」

「さつさと片付けるわよ。早くでてきなさい。」

Aクラス先鋒は木下優子。どうもFクラスを見下している節がある。まあ、この学園のスタンダードな態度なのだが。それに対しFクラスは…

「わしが行くのじゃ。」

「ああ、行つてこい秀吉。」

秀吉だと? どうじうつもりだと問い合わせたが、坂本があまり見ていろと言わんばかりの素振りなので何んでいるので何かあるのだろう。あるいは姉弟だから何か弱点とかがわかるからか。

「秀吉、ちょっとといいかしら?」

「なんじや、姉上?」

「あなたCクラスの小山をたつて知つてる?」

「はて、誰じやそれは?」

Cクラスの小山といえば、秀吉の変装による一セの挑発にまんまと騙され、Aクラスへと宣戦布告見事に敗北。今CクラスはDクラス相当の設備になっている。

「ふーん、ちょっと来てくれるかしら?」

「何じや、姉上。なぜワシの腕を掴むのじゃ?」

そういうと有無を言わさず廊下へと連れ出した。

「あんたのクラスでいつたい何を言つてくれたのかしら？どうして私がCクラスの人たちを膝呼ばわりしたことになつているのかしら？」

「はつはつは、それはじやな姉上の本性をワシなりに推測して……ちが、姉上！そっちの関節はそっちには曲がらな……ギャアアアアア！」

聞いてはいけないような音声が聞こえている。つてまずくないか？

ガラガラガラ

扉を開けて木下さんが戻つてくる。

にこやかに笑いながらハンカチで返り血を拭う木下姉。

「秀吉は急用ができたから帰るつてさ。代わりの人出してくれる？」

「い、いや…………うちの不戦敗で良」ちょっと待つてくれ。Ms・高橋、質問があります。今の木下優子の行為は試験召喚戦争のルール『召喚者自身の戦闘参加』に当たるのではないでしょうか？

坂本は不戦敗を認めようとしていたが、ここは俺が遮つた。上手く揺さぶりをかけられれば有利になる。

「なによ、何か証拠でもあるつていう？」「少し黙つてくれないか？」今俺はMs・高橋に質問しているんだ。ちつちつ

木下姉が隠れて舌打ちをしていた。おおかた皆が想像している、優等生像はメッキなのだろう。

「しかし、先程は試験召喚獣を出していませんでしたが。」

「なら、質問を変えましょ。俺は勝つためには何でもやるつもりです。もしこの場で我々FクラスがAクラス全50人のうち48人をぶちのめしたら、Aクラスは2人しか代表を出せなくなり、自動的にFクラスの勝ちになるのでしょうか？先程の木下優子さんの行為は、被害者が1人とはいえ、いま私が言つたことと同じではない

でしょうか？」「

「ちょっと、有明君何言……フゴフゴ」  
吉井がまた、何か言おうとしていたが坂本が黙らせていました。ありがたい。

「それは……」

よし、M S・高橋がどもつてきた。ここでもう一押しだな。

「それならこの一回戦はFクラスの不戦敗で結構です。こちらとしても第二の木下秀吉を作りたくありません。今は1人でも人材は惜しいですから。しかし、今後の再発を防ぐため、木下優子さんに私が考えたペナルティを課して頂きたいのですが、いかがでしょうか？」

「…………さあ、どうだ？」

「……わかりました。認めましょ。」

「…………よし、勝つた！」

「それでは、本来なら補修するはずの木下秀吉君の補修を免除し、木下優子さんの得点を全教科0点にしてください。秀吉の補修免除はあくまでもおまけです。木下さんに10教科分無駄な回復を強いられますので……いかがでしょうか？」

「承認します。」

M S・高橋が認め、Aクラスの前のスクリーンにはこう表示された。

『Aクラス対Fクラス

木下優子対木下秀吉

木下優子の不戦勝。

特例措置により、木下優子の得点を剥奪。

Aクラス

Fクラス ×

』

木下姉が恨めしげに俺の方を向いていたが、自業自得だろう。余計な事をしなければ普通に勝てたはずなのに……。

「では、一人目の方どうぞ。」

さつきのひとの動搖もあつたろうに、平然とＭｓ・高橋は進行を行う。

「有明、頼むぞ。」

今度はこちらが科目選択権を持つている試合（1・4がAクラス、2・3・5がFクラスが科目選択権を保有している。）だ。そのため俺か土屋を出す場面だが、坂本は俺を先にだすよつだ。異論はないため素直に従う。一方Aクラスは…

「私が行きま…」「すみません。佐藤さん私に行かせてください。…いいですよね、翔子さん。」「…………うん、さくらに任せる。有明の力を一番分かっているのがさくら、『めんなさい』美穂。」…いえ、わかりました。2回戦は天王洲さんに任せます。」「さくらが出て来るようだ。

「洋太郎さん、お久しぶりです。」

「まあ、じばらぐぶりとでも言つておこいつか？」

相手はさくらだけあって、ちょっとの隙でも付け込まれる。堅物の多いAクラスの中では珍しく臨機応変な対応ができるだろつ。

「洋太郎君、あの……これが終わつたら、大事な話があるので、残つていってくれますか？あ、戦争の事には関係ありませんので。」「ああ、構わないよ。」

「ねえねえ、有明君。あの子とはどういう関係なの？」

吉井がまた尋ねてきた。おそらく自分で考える事をしないのだろつ。

「ああ、あいつの家は近所で俺ん『総員、有明を狙え！』」…おつ、危ねえ。何しやがるんだ！」

いきなり、クラスメート 3人（坂本・姫路・島田）が妙な覆面を被り、俺にカッターを投げ付けてきた。なんとか回避したが……これが噂に聞くFFF団か？

「おまえら、何やってるんだ！」

「黙れ、雄一！女の子と仲良くおしゃべりしてるなんて……戦争の前にあいつを、あいつを……」

坂本が止めようとしているが、吉井を始めとするFクラスの連中は

止まらないようだ。

スツ…（俺がコンパスを投げる音）

シャツ（コンパスが吉井の皮膚を掠める音）

「吉井、次はここ（頸動脈を指差す）だぞ、少し黙つてくれ。」「すいませんでしたっ！」

流石に命には代えられないだろう。

「そろそろ始めます。科目を選んでください。」

M S . 高橋が何事も無かつたかのように話す。大丈夫なのか?「この教師は?

「ええと…日本史で「物理でお願いします。」どういうつもりだ、さくら。」

「いえ、このままではFクラスが科目選択権を3回行使し、Aクラスは1回しか行使出来なくなってしまいます。」これは、この2回戦はこれで決めて頂きたいのです。」

さくらはサイコロを1個取り出した。

「これで奇数が出たら日本史、偶然が出たら物理で対決というのはいかがでしょうか、洋太郎君?」安心をこのサイコロには仕掛けは何もありません。お確かめください。」

さくらはサイコロを手渡した。

「…………特に何もないようだが、こちらが投げても構わないか?」

「ええ、」

「では。…コロコロ…4物理か。」

どうやら天は見放したようだ。

「では、物理で行います。」

何でさくらは物理を選んだか…それは

「「試験召喚!」」

Name : Sakurra Tennenosu

Score : 242

VS

Class F

Name : Youtaro Arriake

Score : 63

物理は俺の圧倒的な弱点だからだ。

『おーーい！』

Fクラスの皆も今までの点数との違いに驚く。  
「行きます！」

さくらの召喚獣はハルバートを両手で持っている。防具はプレート  
メイルだが、その攻撃力は圧巻だろう。

「よつ……と

突きをしゃがんでかわしその隙に中に潜り込んで木の杖でペチペチ  
叩く。

『242 238』

「よ、弱いよ。有明君、大丈夫なの？」

吉井が心配してきた。

「はつきり言ってやばい。防御が薄い。そのうえ魔法召喚獣は単科  
目で100点を越えなきや魔法は使えないんだよ。」

そんな事を言つてる間にもさくらのハルバートが引かれた。俺は今  
度は横に避け、攻撃をロープに「掠らせた」。

『63 70』

『得点回復？』

これにはFクラスどころかAクラスの人間も驚いていた。

「これが、魔法召喚獣の特徴。ロープに攻撃を掠らせれば得点を増  
やす事が出来る。」

「関係ありません！」

さくらは今度は横にハルバートを薙いだ。

『 70 0

だれもかれも俺の敗北を予想していたが……

「リザレクションー！」

『 0 224』

叫んだ途端、召喚獣に付いていた首輪が光り、壊れた。そのかわりに戦死するはずの召喚獣がまた、得点を戻した。

「これが俺の腕輪がわりの能力。単科目でしか使えないが、1回の戦闘で1度だけ総合得点の1割を戦死した教科に分けることが出来る。」

「それでもまだ得点は低いわよ？」

「心配するな。魔法が使えればこっちのものだ。」

魔法が使えるとわかり、さくらは緊張し、攻撃に備えた。

「85点を消費し、シャイン』『224 139』

まばゆい光がフィールドを覆つた、そして……

「40点を消費し、ウエポンナイズ・ブレード』『139 99』

杖が刀になり、さくらの召喚獣の首を断ち切る。

『 238 0』

「勝者Fクラス」

M s . 高橋の声がした。

『 Aクラス : ×

Fクラス : × 』

Fクラスの歓声に包まれながら、皆が待っている所に戻った。

「流石なのじや。」

どうやら秀吉も戻ってきたようだ。

「まあな、」

「では3回戦の代表は前へ。」

一勝一敗のイーブンに持ち直し、大事な3回戦。ここもさちらが科

目選択権を保有しているため

「……（スック）」

「当然、土屋を出す。

「じゃ、ボクが行こうかな。」

Aクラスからは色の薄い髪をショートにした女子が現れた。見た感じ少し男っぽくも見える、あまり見た事がない。

「一年の終盤に転入してきた工藤愛子です。よろしくね。」

「教科は何にしますか？」

「……保健体育」

高橋女史の質問に対し迷わず答える土屋。彼は残りの9科目では、あの吉井<sup>バカ</sup>にも劣るがこの保健体育だけは学年のどの生徒をも凌駕する実力を持つ。

「土屋君だけ？随分と保健体育が得意みたいだね？」

工藤が土屋に絡んでくる。余裕の態度で。

「でも、ボクだってかなり得意なんだよ？……君と違つて、実技ですね」

……保健体育の実技が得意？つまりスポーツが得意と言つ意味であろうつか？まあ、おそらくは工口方面であるうけれど。

俺の後ろでは吉井がバレバレなぐらいドキドキしているようだった。

「そっちのキミ、吉井君だけ？勉強苦手そうだし保健体育で良か

つたらボクが教えてあげようか？もちろん実技で」

「フツ。望むところー」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育なんて要らないのよ！」

「そうです！永遠に必要ありません！」

「……」

「島田に姫路。明久が死ぬほど哀しそうな顔をしているんだが俺は思わず呟いた。流石にかわいそうだった。

「そろそろ召喚してください」

M S・高橋の指示でようやく二回戦が始まる。土屋は小太刀の一刃流、工藤のは……

「なんだあの巨大な斧は！？」

明久が驚きの声を上げる。オマケに例の腕輪も装備している。

「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ。」

工藤が笑いかけると同時に腕輪が光り召喚獣が動く、かなりのスピードで。大斧に雷光をまとい土屋の召喚獣に襲い掛かる。

「それじゃ、バイバイ。ムツツリーーくん」

「……加速」

土屋がそう呟いた時、土屋の腕輪が輝き、召喚獣がブレた。

「……え？」

戸惑う工藤。土屋の召喚獣は敵の射程外にいた。

「……加速、終了」

土屋がもう一度呟く。次の瞬間、工藤の召喚獣が全身から血を噴き出して倒れた。

Sub ject : P · E ·

Class A

Name : A iko Kudo

Score : 446

V S

Class F

Name : K ota Tsuchiya

Score : 572

572点など俺の日本史でもなかなかお目にかかるない。工藤もかなりの点数だが土屋はそれすらも大きく越えていた。

「Bクラス戦のときは出来がイマイチだつたらしいからな。」

驚く俺と明久に坂本が説明する。そーなのかー。他の科目では俺が勝っているのになぜが負けた気分だ。

「そ、そんな……！この、ボクが……！」

工藤がショックで床に膝をつく。それはそうだ。満を持っての高得点がいとも簡単に破られてしまったのだから。

「これで2対1ですね。次の方は？」

高橋女史はそれに構う事無く作業を進める。執着心というものはないのだろうか？

「あ、は、はいっ。私は」

こちらからは姫路が出る。

「それなら僕が相手をしよう」

Aクラスから出てきたのは久保利光。

「やはり来たか、学年次席。」

坂本の言うとおり、奴は姫路に次ぐ学年三位の実力者で、姫路が振り分け試験を途中退席したため、学年次席の地位になっている。

「ここが一番の心配どころだ。」

雄一の心配には理由がある。久保と姫路の実力はほぼ互角。総合点数ではせいぜい20点程の違いでしかなく。科目次第では負ける可能性が否定できない。最初の対木下戦で出せばよかつたのに……まあ、いまさら後悔してもどうしようもないのだが。

「科目はどうしますか？」

「総合科目でお願いします」

M S・高橋が尋ねるとすぐに久保が答えた。

「わかりました。では、始めてください。」

「試獣召喚！」

Subject:Total

Class A

Name:Toshimitsu Kubo

Score:3997

VS

Class F

Name : Mizuki Himeji

Score : 4407

久保は焦った。1年生の頃はその差は殆どなかつたのに2年生になつてからのほんの僅かな期間で自分と姫路との差が大きく増えたのだから。

何があつたのかは知らないが久保は考えた。そのまま戦つたら負け、そして、代表が出ないうちに負けてしまうからだ。そう考えた彼に迷いはなかつた。武器の鎌の若干のリーチを生かし一撃で葬り去ろうとした。

そして……

Subject : Total

Class A

Name : Toshiimitsu Kubo

Score : 0

V/S

Class F

Name : Mizuki Himeji

Score : 0

彼が選んだのは相打ちだった。僅かにリーチが良くても攻撃の威力は姫路の方が上だからだ。

『…………』

Fクラスはさつきまでのイケイケムードから一気に落胆した。それもそのはずだ。今までクラスを引っ張ってきた姫路が相打ちとは言え、負けたからだ。

「最後の一人、どうぞ、なお、ここでAクラスが勝ちますと、勝敗は全くの同点になります。再交渉の準備をおねがいします。それ

では各代表は前へ

「……はい」

Aクラス首席で最後の敵、霧島翔子。そしてFクラスからは当然…

「俺の出番だな」

我らが代表坂本雄一が出る。

「教科は何にしますか?」

「教科は日本史、内容は小学生レベルで百点満点方式だ。」

坂本の宣言でAクラスがざわめきだす。

「わかりました。そうなると問題を用意する必要があります。日本史の飯田先生を呼んできますので、少々このままでお待ちください。」

高橋女史は教室を出て行く。俺と明久は坂本に近づく。

「雄一、あとは任せたよ」

「期待しないで待つてるからな」

「まあ、やるだけやつてくる。有明、後は頼むぞ。」

「洋太郎で構わない。何となくおまえにはそう呼んでもらいたい。それとその後のことは段取り通りに。」

「おうよ。俺も雄一って呼んでくれ。んじゃあな洋太郎。」

俺達は互いの手を握る。

「……（ピッ）」「（ピッ）」

土屋が歩み寄り雄一にピースサインを向ける。

「お前の力には随分助けられた、感謝する」

「……（フツ）」「（フツ）」

土屋は口の端を軽く持ち上げ、元の位置に戻る。

「坂本君、のこと、教えてくれてありがとうございました」

「ああ。明久の事か。気にするな。あとは頑張れよ」

「どうやら雄一は姫路に試召戦争を始めた理由を話したようだ

「はい」「

「では、最後の勝負、日本史を行います。霧島さんと坂本君は視聴

覚室に向かつて下さい。」

「……はい。」

霧島が短い返事をし教室を出て行く。

「じゃ、行ってくるか」

それに雄一も続く。

「皆さんはここでモニターを見て下さい。」

高橋女史が機械を操作すると壁にディスプレイに視聴覚室の様子が映し出された。

「では、問題を配ります。制限時間は五十分。100点満点です。では始めてください」

飯田先生の手によって問題用紙が配られる。勝敗はある問題が出るかに（ある程度）かかっている。万が一坂本が満点をとつたら保険の策を使わなくてすむからだ。

そして、テストが終わった。

Subject : Japanese History (Full  
Score = 100)  
Class A  
Name : Shoko Kirishima  
Score : 97  
VS  
Class F  
Name : Yuji Sakamoto  
Score : 53

俺はこれほど自分で自分を褒めてあげたいと思った時はなかった。

## 第10問（後書き）

感想を待っています。Aクラス戦はもう少し続きます。

## 第1-1問～本当に決戦～（前書き）

バカテスト　日本史

問題：次の（ ）に正しい年号を記入しなさい。

（ ）年 キリスト教伝来

霧島翔子の答え

「1549年」

教師のコメント

正解。特にコメントはありません。

坂本雄一の答え

「雪の降り積もる中、寒さに震えるキリの手を握った1993」

教師のコメント

ロマンチックな表現をしても、間違いは間違いです。

## 第1-1問「本当の決戦」

「ただいまの勝負は、Aクラス霧島翔子さんの勝利です。よつて2勝2敗1分けで同点です。規定に従い両クラスによる再交渉となります。」

M.S.高橋が事務的に話したあと、教卓に戻った。

「すまない、俺はトイレに行きたくなつた。代表としては不本意だが席を外したい。まあ、Aクラスを待たせるのも申し訳ないから全権大使として、有明洋太郎に交渉を任せ決定にはすべて従おう。高橋女史構わないか？」

「……トイレであればしようがないですね。許可します。」

「ありがたい。では失礼。」

雄一がトイレに行きたいとの許可をもらつた。

全権を委託された俺は交渉のテーブルに着いた。Aクラスの交渉相手は……

「言つとくけど、Aクラスには戦わないといつ選択肢は無いわ。さつさと負けを認めなさい。」

木下優子か。

「まあまあ、少し落ち着いて話しましようよ。時間はまだまだありますし。」

「いいこと、これが最後通牒よ。もう戦えないと負けを認めるか、せいぜい玉砕覚悟で最後まで抗うか、さあ選びなさい。」

「はあ、交渉の余地はないと言つたところでしょうか。：M.S.高橋、最後に確認したいのですが、もしこちらが玉砕覚悟で戦うときは最初に行つた5対5の結果を継続して、ということになりますよね？」

「そうですね。そうなります。」

「わかりました。…それでは……我々FクラスはAクラスの最後通

牒に従い、『たつた今から』試験召喚戦争を行います。』

「承認します。」

「戦死者は補習だ——！」

いつの間にいたのやら、Mr・西村が先の5対5での戦死者である、さくら・工藤・久保・姫路を補習室に連れていくとAクラスを出ようとした矢先のこと…

「Fクラス特攻隊長吉井明久、Aクラスの霧島さん、木下さんを除く全生徒に総合科目で勝負を挑みます！」

吉井が無謀とも言える勝負を仕掛けた。

「何をやつてるんだ？吉井。戦死は目に見えるぞ？」

「本当にやらしいのですか？」

本当の意味での特攻になるためMr・西村とMs・高橋が警笛をするが、

「やりせてください。」

吉井は言い切った。

「わしもやるのじや。」

「ウチもやるわ。」

『俺もだ。』

気付けばごく僅かの生徒を残しFクラスはAクラス全生徒への戦意をみせた。

「わかりました。承認します。」

『『試験召喚！！』』

Subject : Total

Class F

Name : Akihisa Yoshihi

Score : 759

Class F

Name : Hideyoshi Kinoshita

Score : 901

Class F

Name : Minami Shimada

Score : 845

Class A

Name : Mihoko Sato

Score : 3671

Class A

Name : Haruki Teramoto

Score : 3007

Class A

Name : Kumiko Tamaki

Score : 2580

Class A

: : :

スマッシュユーブラザーズも真っ青な両軍入り乱れての大乱闘が始まつた。文字通りに点数の桁が違うAクラスとFクラスなのだがその戦況は……

『得点に比べればAクラスはあまり芳しくなく、Fクラスがうまくやっていた』

Aクラスの武器は得点が高いため大剣や大鎌など必然的に巨大な武器になってしまつ。

しかし、半径10mの円中に約90人も人がいればどうだらうか？このような時、大きな武器はその持ち味を失う。対してFクラスの武器は小型のものがメインである。

また、Fクラスはヒット＆アウエイを徹底しており、1回のダメージは少なく一撃でも食らえればそれまで。既に戦死者も出しているが、食らいついている。

「何のつもりかしら。」

戦闘に参加していない木下優子がこれまた参加していない俺に問い合わせる。

「なつて、強者に弱者が勝つ戦略の一つだよ。あんた以外のAクラスの連中には来てもらつちゃ困るからな。」

「どうのつもりかしら？」

「なあ、あんたの代表が最後に受けたテストってなんだ？」

「何つて、振り分け試験じゃないのかしら。」

「ハズレー、正解はあちらをどうぞ。」

そういうて俺は大乱闘の影に隠れたもう一つのフィールド（せんじょう）を指さす。

Subject : Japanese History

Class A

Name : Shoko Kirishima

Score : 72

V S

Class F

Name : Kensuke Ishibashi Score : 104

Class F

Name : Ryo Sugawa

Class F

Name : Ryo Sugawa

Score : 78

Class F

Name : Keita Muto

Score : 80

「な、なんで代表があんな点数…ま、まさか！」

「そう、そのまさかさ。霧島が最後に受けたテストはつこさつきの対坂本戦での100点満点の日本史。97点だったはずだ。そりやいつもの霧島の点数なら、姫路がいない今、いや、多分いても勝てなかつただろう。でも、100点くらいならFクラスにだって取れるやつはいるわ。ほら、こう言つてる間にも…」

Subject : Japanese History

Class A

Name : Shoko Kirishima

Score : 41

VS

Class F

Name : Kensuke Ishibashi Score : 75

Class F

Name : Ryo Sugawa

Score : 68

Class F

Name : Keita Muto

Score : 37

「いつもとは明らかに操作に違いが出ている上、同程度のやつら3人と戦ってるんだ。負けるのも無理はない。」

「そんな……」

木下は唇を噛んでいた。役に立ちたいのに立てない。召喚したその瞬間、補習室にいつてしまう現状への悔しさが滲み出ている。

「あんたらの敗因はな、Fクラスを完全に嘗めきついていたこと。そして……ルールを研究しなかつたことだ。」

その瞬間、石橋の召喚獣の出刃包丁が霧島の召喚獣を切り裂いて、俺達は対Aクラス戦に勝利をおさめた。

## 第1-1問～本当の決戦～（後書き）

実はこれが書きたくてこの小説を書きました。

とはいって、これで完結はしないでまだまだ続きます。

次回をお楽しみに！

なお、学校が始まつたため更新が遅れる可能性がある」といふことをご容赦ください。

P・S・第1問の後にサブタイトルを入れてみました。いかがでしょう。好評でしたら、これからと今までのにもサブタイトルを入れていきます。

## 第1-2問～戦争と平和（前書き）

バカテスト 世界史

問題：『戦争と平和』を著したロシアの小説家は、誰でしょう？

姫路瑞希の答え

「トルストイ」

教師のコメント

正解です。トルストイの代表作は他にも『アンナ・カレーニナ』や『復活』等文学のみならず、当時の社会にも影響を与えたので覚えておきましょう。

有明洋太郎の答え

「レフ＝ニコラエヴィッチ＝トルストイ

似たタイトルの『戦争と平和の法』の著者は『国際法の父』フランシス・グロティウス

教師のコメント

フルネームまで正解です。感服しました。

天王洲さくらの答え

「グロティウス」

教師のコメント

どうやら、有明君と一緒に勉強したようですね。グロティウスはオランダの法学者です。よく覚えておきましょう。

土屋康太の答え

「ヒロス＝トイ」

教師のコメント

小説家のムード台なしです。土屋君にかかれどんなんものでも淫ら

になってしまい残念です。

吉井明久の答え

「トルネ」

教師のコメント

呆れても言えません。

後で土屋君と一緒に職場[至まで]。

## 第12問～戦争と平和

霧島の召喚獣が戦死した。

「やつたのじや…」

「…ついに」

『システムデスクだ…』

Fクラスの喜びは、頂点に達した。

「…………」

「馬鹿な…」

対してAクラスはあるでお通夜の時のような雰囲気になつた。

「……おおー、洋太郎、やつたか。」

勝利の叫びを聞いたのか、雄二がAクラスに帰つてきた。

「まあな、臨機応変を辞書から除いてるような奴らに戦争で負けるわけがないぞ。」

「違いない。」

俺は雄二と談笑をしていた。その時

「……雄二、約束。」

あ、やせいのくろかみおじょうがあらわれた！

「は？どうじうつもりだ。翔子？あんたは負けたんだぞ。」

「…………関係ない。雄二は私に負けた。だから約束。」

「ははは、これは一本取られたな。おまえは霧島に負けたんだ。言

うこと聞いてやれよ。」

「洋太郎、おまえもか…分かつたよ。なんでも言え。」

霧島はホツとしていた。

「…………（カチヤカチヤカチヤカチヤ…）」

そして土屋は構えていた。

「…………それじやー」

霧島が姫路に一度視線を送り、再び雄二に戻す。

「……雄二、私と付き合つて」

「俺の予想の斜め上の要求だった。

「やつぱりな。お前、まだ諦めてなかつたのか

雄二は分かつていたようだつた。

「……私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き」

結局、噂はガセで霧島は幼馴染の雄二が好きだつたんだ。姫路を見ていたのは、雄二の近くにいる異性を警戒していたわけだ。

「拒否権は？」

「……ない。約束だから。今からデートに行く」

「ぐあつ！放せ！やつぱこの約束はなかつたこと」

ぐいっ つかつかつか

お嬢様はまさかの肉体派だつた。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「さて、お遊びの時間は終わりだ。」

例の補習教師、M・西村だった。

「M・西村、我々になにか用でも？」

「ああ。今から我がFクラスの補習について説明をしようと思つてな」

「……我がFクラスとはどういう事だ？」

「おめでとう。お前らは戦争に勝つたおかげで、福原先生から俺に担任が変わるそうだ。これから一年、死に物狂いで勉強できるぞ」

「なにいつー？」

俺を除く男子全員が悲鳴をあげる。

「どうして、鉄人？なんで担任が代わるの？」

吉井が皆の気持ちを代弁するかのように質問する。

「いいか、確かに前達FクラスはAクラスに勝つた。それは心から賞賛しよう。」

賞賛する気は見られないが。

「だが、その後はどうする？お前達はつねに狙われる立場なんだぞ。それに、今回は坂本や有明の作戦に因つて勝つたが、お前達の戦い方に先生方からも苦情が出ているんだ。」

「M」・西村。これはあくまでも戦争でしょ？ 戦争のやり方に綺麗も汚いもなだと思いますが？」

「有明、気持ちはわかるがここは教育機関だ。教育機関である以上、Aクラスから設備を奪い、今の文月学園の代表たるお前達Fクラスにはいい成績を取る義務がある。それと、ルールについては今後改良が加えられるだろ？」

「改悪かもな。でもルールが改正されるまでは戦争は出来ないでしょうね？」

「……そうなるだろうな。それにしても随分落ち着いているな。」

「ええ、どんなルールでも研究して、最善の策を講じる事くらい出来なくて試召戦争研究会なんてやつていませんよ。ところで今日はこれまでですか？」

「ああ、気をつけて帰れ。」

すぐ近くで吉井が島田と姫路から一緒にクレープだと映画だとか言っていたが関係なかつたので無視した。命短し恋せよ乙女つてか。

「さて、帰りますかな。」

「待つてください、洋太郎君。」

突然さくらが呼び止めた。

「なにか、ようか？」

「えつと、一騎打ちの前に話した件ですが…」

「一騎打ち…ああ、話の時間を割いてくれつてやつか。帰りながらでいいか？」

「はい。」

下校途中

「で、なんだ？話つて。」

「えっと…まずは、どうやつてAクラスに勝つたのですか？補習室にいたのでわかりませんでした。」

「じゃあ、ヒントを。霧島翔子が『最後に』受けたテストは？」「それは、…振り分け…いえ、坂本君との日本史テストですね。でもどうやってその状況を作ったのですか？まさか洋太郎君が一気に片を付けたのですか？」

「まさか、そんなことしたら我らが代表のモットー『学力がいいやつが必ずしも勝つとは限らない』に反しちまつ。」

「なら、どうやって…？」

「強引に霧島とそれ以外とに分けるようにすればいい。」

「では……まさか、霧島さん以外の全員と試合戦争を行うと？でも、Fクラスの生徒ではあっさりやられて元の木阿弥ですよ？」

「一人でダメならみんなでやればいい。霧島を叩く部隊 + 僕を除いて全員が全員に申し込んだ。そうすればどちらかのクラスが全滅するまで時間を稼げる。相手のクラスが誰か一人でも残っているのに戦闘を止め引っ込めたら補習行きだ。」

「そんな事をしたら、守りは……」

さくらは驚いていた、余りにも防御を考えないこの作戦に。

「だから、俺は一騎打ち、その後の交渉をAクラスの中で行つた。例えるなら、Fクラスは既にAクラスの本丸まで侵略しているようなものだ。真面目さを煮詰めたようなAクラスの連中が、戦争の交渉中にAクラスをでないだろ？それに、万一本丸のやつがFクラスを全滅にする。あるいは、霧島がいつもより圧倒的にひどい性能でも同程度の点数の奴ら3人を葬り去つたとしても、俺がいるからな。そうなつたらなりふり構わず無双するだけだ。」

「つまり、Aクラスを会場にしていった時点で…」

「ああ、俺の作戦は組み上がっていた。  
シナリオ

「ほ~、流石です。」

「褒めても何もでないぞ。」

そんな風に、話しているうちに皿のそばまで着いた。

「んじゃな、また明日なさくら」

「待つてください!!」

いきなりさくらの声が大きくなつた。

「わっ!!びっくりした。」

「わわ、『めんなさい』でも、もう一つ大事な話があります。」

「今じゃなきやダメか?」

「はい、（スー・ハー・つん、頑張れワタシっ）……私、天王洲さ  
くらは有明洋太郎君のことが好きです。」

「……はい?」

衝撃的だつた。

「だから、私は洋太郎君のことが好きなんです。大好きなんです!  
Loveなんですっ!!」

「お、落ち着けって。」

「あ、ごめんなさい。取り乱しちゃつて…恥ずかしい。…あの…お  
返事聞かせてください。」

今の朱くなつたさくらはとても可愛かつた。そんなさくらに俺は…  
「俺を理解できそつなのはわくらだけだと思つ。俺で良かったらよ  
ろしくな。」

「……は、はいっ。」

さくらは嬉し涙を流していた。こんなに想つてくれていたことに感  
謝だ。

「それで、…明日デートに行きませんか?」

いきなりデートのお誘いだつた。

「喜んで、でも場所とかは?」

「心配ありません。私に任せて下さい。」

「分かつた。じゃあな。」

「はい、また明日。」

俺は明日からが楽しみになつた。

## 第1-2問～戦争と平和（後書き）

一応原作1巻はこれでおしまいです。  
この後は洋太郎君とやくひわやんのトーク等を挟み学祭編となります。

感想待っています。

第12・1問

朝、田を覚ますと知らない天井だった。

「…………？」

はつきり言つていろいろあつて言葉にできない。

「なんじや」「りやー！」

「あ、洋太郎君お田覚めになりましたか？おはよう」「さります。」  
なんでさくらがここにいるんだ？…つて」とまさか……？

「なあ、さくら。」「こいつで…」

「はい、洋太郎君の家のはすむかいの天王洲家ですよ。」  
デスクヨネー。でもそうなると机から何からのインテリアの配置はどうやつて？

「じゃあ、なんで机とかもここにあるんだ？」

「えつと、親御さんに聞いていませんでしたか？」

「何を？」

「洋太郎君が今日から、ここに住むのを。大変だつたんですよ、洋太郎君が寝ている間に引越しさせるのは。」

ナ、ナンダッテー！

霧島のお嬢様はかなりの肉体派でしたが、天王洲のお嬢様もなかなかの行動派でした。ていうか、なんでそんなことを、うちの親は当事者たる俺に伝えなかつたんだ？

「着替えが終わつたら朝食を頂くので、下の階の食堂に降りて下さいね。場所はわかりますよね？」

「ああ、一応な。」

まあ、ともかく飯を食べなければどうにもならないので、着替えて下に降りる。

まあ、いつものように軽く朝食を食べ、歯磨き等を終えると、

「洋太郎君、今日はデートですよ、デートつー！」

「はいはい、わかってますって。」

「では、もう一度データ用に身嗜みを整えるので…覗かないで下さいね。」

「誰がするかっての、犯罪者にはなりたかねえよ。」

「ありがとうございます。……心の準備が出来たら毎日でもお見せしますから。(ボソッ)」

最後の方は何を言っているのかよく分からなかつたが、気にすることはない。

俺は期待しながらくじを待っていた。

## 第1-2・1問（後書き）

かなり短めですみません。

学校が忙しくなりますので今後は更新が不定期になりますが、ご了承下さい。

次回はデーター本編です。

「お待たせしました。」

「…………」

さくらの身支度が終わり、顔を見せたが、言葉を失った。  
艶やかな金髪に合うような黒のワンピース。顔には薄化粧を施し、  
魅力を十分引き出している。

「…どうかなあこましたか?」

「…いや、見とれてた。」

「…そんな（カツ）」

わくらは頬を桃色に染めて、そんなわくらに見とれてて……

しづめりへじて、

「…」こんなことをしても、仕方がない。そろそろ行こうか?」

「…そう、ですね。」

「んでだ。どこに行くつもりなんだ?」

「えーっと、『ゲーセン』なるものに行きたいのですが、この辺り  
にはたくさん有ります……どこのいいのか分からぬのです。」  
ゲーセンだと?

「ゲーセンって何をしたいんだ?」

「いえ、ただ皆さんのがよく行つてこられたのことでしたので、行つて  
みたいと思つていたのです。」

「ふーん、じゃあ行くか?俺がよく行つてる所でいいよな?  
「はいっ。」

「ゲームセンター」

俺達は地元で一・二を争う大きさのゲーセンに行つた。途中手を  
繫いで歩いたがさくらの手はすべすべだった。

「ここが、ゲーセンですか?」

「いかにも」

「それで、どうやって遊ぶのでしょうか？」

全く知らないんだな。こまどりも珍しく。

「まあ、こまどりとあるけど……俺がこまどりやつてこる感じでいいか？」

「はい、お願ひします。」

「……」  
「こいつが俺がゲーセンに来たときにこいつもやつてこるやつだな。  
「どうやって遊ぶのですか？」

「端的に言えば、曲のワズムに合わせてこのパネルを叩くんだ。ちょっと見ててな。」

「……」  
「とりあえず、赤の……あれぐらいでいいかな。難易度的にも、出来たらカツコイイし、ノーグレー程度ならやつてるからな。」

「凛として咲く花の如く」

タカラカラカラ、タカララン、タカラ、タカラ～ン～ってこいつのようなイン

トロが流れる。俺はここから田の前の4×4に集中した。

凛としてはなんといふの……心

やり終えた、とりあえず見本にしてはやつ過ぎたと思つたよつないん  
見てみると。

「…………」

やつぱりな。

「あのー、これってある程度のレベルになると呑く順番とかを覚えたりするんですか？」

「まあ、そんなんじゃないか？赤になると初見で出来たらたいしたものだよ。っていうか怖い。」

「やつのですか。先程の曲なら何とか行けそうですが？」

「……え。……んじゃ、やってみて。」

それには初見で出来るというが……流石に初めてやって出来たらものはや奇跡だぞ。

～～少女・jobe　七中～～

俺は奇跡を田の端たりにした。

## 第1-2・2問（後書き）

更新が非常に遅れ、申し訳ありません。  
書いてる時間が通学時の地下鉄の時間でして……オリジナルシナ  
リオは難しいです。

辞めたりはしないので気長にお待ち下さい。  
なお、やつてほしい企画がありましたら、教えて下さい。

「……なんだよ。いきなりフルコンツト……」

「お気持ちを害したらすみません。でも… できちやいました」「しかし、よく出来たな。なんかコシもあるのか?」

「いえ、何となくです。リストの超絶技巧練習曲の方がずっと難しいですよ?」

「こ、これが天衣無縫なのか?確かにさくらは音楽は超一流だけど、まあ別に『白の星屑』『ユイ・ヒートール』等の一つ名は付いていないが。

「……んじゃ、昼飯はどうするよ。」

「うーん、ネットで評判のカフェがありますから、そこでしませんか?」

「いいんじゃない。場所は?わかるのか?」

「はーい、NAV TIMEなのです。」

……さくらも大分ノリが良くなつたみたいだ。

### 喫茶店ラ・ペディス

さくらの AVITIME の(ちょっと間違えたりもした)案内で着いた喫茶店はなかなか感じの良いものだった。

「さて、何を食べようか。」

「そうですね。私はこのオススメのチョコブルーベリーショートケーキにしましょう。」

何だろう。なんか……

「ふーん。んじゃあ俺は……ブルーチーズケーキとか、完全に地雷だろ。…このウーロンミルクレー‌プにしてみよ‌。」

ほかにまともな料理が見つからない。

「では、頼みましょ‌か。すいませーん。」

さくらが店員を呼ぶとツインテールの店員が現れた。

「お待たせしました。チツ美春達をどん底に陥れた豚野郎と…思い出しました、Fクラス（バカ）に負けたAクラス（大バカ）の一員でしたか。」

「なんだ？なかなか、喧嘩腰だな……まあいい、このチョコブルーベリーショートケーキとウーロンミルクレー<sup>フ</sup>プを一つずつ」

「お飲みものは？さつさと決めなさい。」

「紅茶でいいよな？」「はい」…紅茶2つ

「当店に『紅茶』と言つ飲み物はありませんわ。豚野郎」

…は？

「どうこうことでしょうか？」

「だから、紅茶といつてもダージリンやアッサムとでも言つてもらわなければ困りますわ。」

…品種指定…だと。コーヒーショップならまだしも、ただの喫茶店でそこまでいくか。

「それでしたらヌワラエリヤを」

「そちらの豚野郎は？」

「ラプサン・スチョン」

「畏まりましたわ」

「洋太郎君、ラプサン・スチョンはお菓子には向きませんよ。」

「ああ、正直ミスったと思つてる。ラプサン・スチョンまで揃えているつてどんどんだけだよ。」

「流石、評判のお店ですね。」

はたして、そうなのだろうか？

「お待たせしましたわ。さつさと食べてさつさと帰つて下さいませ。」

喫茶店にあるまじき台詞だ。それにしてもラプサン・スチョンの臭いが…正丸そつくりだ。

「とりあえず、いただきましょうか。…ハムハム…これ、おいしい

です」

M A J I D E ?

「どれ……うまい。」

テー レッ テレー！

その名前とは裏腹に結構いけるぞ。そりだよな。抹茶があるんだから烏龍茶でもいけないことはないよな。まだまだ料理は奥が深いな……。

そう思索に耽つていると

「洋太郎…君…」

さくらが顔を赤らめながらフォークを突き出した。これは、まさか、あれなのか？

「その……あーん…」

(・・・) キター(・) これでリア充ルート突入でいいよね。

「…早く食べて…下さい。」

何だろ?、すゞく口く聞こえる。とりあえず、さくらのケーキを食べる。なんかイケるな。

まあ、こんな感じで「トー」は終わった。

とりあえず、今度行くときはキーモンあたりにしよう。ラフサン・スチヨンはやり過ぎだ。

## 第1-3問（前書き）

学園祭の出し物を決める為のアンケートに「協力ください  
？あなたが今欲しい物はなんですか？」

姫路瑞希の答え

『クラスメイトとの思い出』

教師のコメント

なるほど。お客様の想い出になるよつた、そういう出しども良いかもしませんね。

写真館とかも候補になりうると覚えておきます。

土屋康太の答え

『Hな本（訂正） 成人向けの写真集』

教師のコメント

訂正の意味があるのでしょうか。

吉井明久の答え

『カロリー』

教師のコメント

この回答に、君の生命の危機を感じられます。

有明洋太郎の答え

『別に……』

教師のコメント

.....まあ、今が充実しているところだ。

### 第13問

桜色の花びらが辺りからフローラーでアートし、代わりに青々とした緑が現れ始めたこの「」。我が文用学園では、年度の最初の行事である『清涼祭』の準備が始まりつつある。準備の為のLHRの時間では、どの教室も活気が溢れている。そして、我がFクラスは……

- - - シーン - - -

クラス内には俺の他に比較的真面目な3人（名前はあえて上げなくとも分かるはずだ）しかいない。むろん準備など出来るはずもない。ちなみに俺は試召戦争研究会のレポートを作っている。Aクラスのパソコン設備は快適だ。

「またたく。もうすぐ清涼祭が始まるのに何やつてんだか……」「俺の隣に島田が座ってきた。

「LHRの時間を使って野球をやるとか言い出したのは雄一だろ？試召戦争のときは代表らしくまとめてたから今回もあいつ主導でうまく進むと思つたんだが、あいつ何考えてんだ？」

「そりだと良いんだけど、残念ながら違うと思うわ。坂本つて一年の頃から興味のない事には全然やる気出さないから」

「要はあいつ、清涼祭に興味がないって事だよな？」

「そうでしょ。一年の頃もあんま関心なさそうにしてたし

「ふーん。ま、俺も試召戦争研究会の仕事があるからどうでも良いけどな」

「それでも……今回の清涼祭だけは何かうまいさせたいのよ……」

少し深刻そうな顔を島田がしながら呟く。

「何だよ、今回の清涼祭だけはって？今までの学園祭とは違う何か

でも……」

俺がそう言いかけたちょうどそのとき

「貴様ら、学園祭の準備をサボつて何をしているか！」

Mr・西村の怒声が聞こえてきた。クラス内に居ても聞こえてくるのは彼だからだろ。まあ、他のクラスのみなさんには迷惑をかけたことをお詫びします。

「さて、そろそろ清涼祭の出し物を決めなくちゃいけない時期が来ただが……とりあえず、議事進行並びに実行委員として誰かを任命する。そいつに全権を委ねるので、後は任せた。」

本当にどうでも良さそうな態度である。島田の言うとおり雄一は興味のない事には全くやる気ゼロで清涼祭にも興味がないようだ。

「うーん……学園祭実行委員は島田とこうじでいいか？」

不意に雄一の言葉が耳に飛び込む。

「え？ ウチがやるの？……ウチは召喚大会に出るから、ちょっと困るかな」「

雄一に推薦された島田はあまり乗り気じゃないようだった。

「雄一。実行委員なら、美波より姫路さんが適任じゃないの？」

「え？ 私ですか？」

そこに吉井が姫路を推薦する。しかし、その判断はアカトだ。

「姫路には無理だな。多分全員の意見を聞いてるうちにタイムアップになる」

雄一の言つとおり、姫路には少數意見を切り捨てるような事はできないからそうなる可能性は高い。

「それにね、アキ。瑞希も召喚大会に出るのよ」

「え？ そうなの？」

「はい。美波ちゃんと組んで出場するんですよ」「学校の宣伝みたいな行事なのに。一人とも物好きだなあ」

意外そうに吉井は言つ。清涼祭のイベントの一つに『試験召喚大会』

とこう企画があり、これの目的は吉井の言つとおり文丘学園の宣传活动のよつなものだ。つてか宣伝だ。

「ウチは瑞希に誘われてなんだけじね。瑞希つてばお父さんを見返したいって言ってきかないんだから」「お父さんを見返す？」

吉井が不思議そうに聞き返す。

「そつ。家で色々言われたんだって。『Fクラスの事をバカにされたんです！許せません！』って怒つてるの」

「へー。姫路さんが怒るなんて珍しいね。」

「それだけFクラスに対する思い入れが強いという事じゃねえのか？」

「だつて、皆の事を何も分かつてないくせに、Fクラスって言ひ理由だけでバカにするんですよ？許せませんっ」

いや、姫路には悪いがFクラスの連中はバカの集団だと思つ。学力でもそれ以外でも。しかしながら、何も分かつてないくせにバカにされたのは面白くない。

「だから、Fクラスのウチと組んで、召喚大会で優勝してお父さんの鼻をあかそつてワケ」

「確かにそいつは面白そうな話だよな。」「

「四人とも。こいつちの話を続けていいか？」

「すまない、雄二。実行委員が島田になる話だよな？」

「だからウチは召喚大会に出るつて言つてるのに」

「なら、サポートとして副実行委員を選出しづ。それなら良いだろ？」

チラツと雄二が俺と吉井の方を見た。おそらくは、経験則からして多分吉井の方を見たつもりで、吉井を副実行委員に仕立て上げる気だろ。

「んとうね、その副実行委員次第でやつてもいいけど……」

「そうか。では、まず皆に副実行委員の候補を挙げてもいいが。その

中から島田が一人を選んで決定投票をしたらいだろ？」「皆もいいな、とクラスメイト達に告げる。すると、教室内からちらほらと推薦の声が聞こえてきた。

「吉井が適任だと思つ

「やはり坂本がやるべきじゃないか？」

「有明なら確実だろ。」

「ここは須川にやつてもらつた方が

「姫路さんと結婚したい」

クラス内から何人かの適任者の名前が挙がる *Without 1 ast*

「ワシは明久が適任じゃと思つがの」

明久に秀吉が一票を投じる。

「つて、秀吉。僕もそう言つ面倒な役は、できればパスしたいななんて」

「それは他の皆とて同意見じゃ。ならば適任のものにやつてもらつた方が良いじゃろ？」「

「むう……それはそうだけど……」

秀吉の言つことが正論なのか反論できない様子の明久。（明久が適任かどうかの保証はしかねるが）

「よし島田。今拳がつた連中から一人を選んでくれ

「そうね。それじゃ……」

ある程度候補の名前が挙がると、島田はホワイトボード用のマーカーで名前を書いてゆく。

『候補？……吉井』

予想通りの名前が出る。

『候補？……明久』

その発想はFクラス故だと信じたい。

「さて、この一人の中からどちらが良いか、選んでくれ

「ねえ雄一」。明らかに美波の候補の挙げ方はおかしいと思わない？

俺は書かれていないからどうでもいい。

「そりだなあ……どちらもクズには変わりないんだが……」

「いりあー真面目に悩んでるフリするんじゃない！あと、平然とクラスメイトをクズ呼ばわりなんて、君らは人間のクズだ！このクラスのモラルはどうなってるんだ！」

「落ち着け吉井。このクラスにモラルなんて高尚なものがあるわけねえだろ。」

適当に明久を煙に巻いてみる。

「普通はあつて当然の物なんだけど」

「ざんねん、ここはFクラスだ。」

「そう言わると何故か納得できちやうのが不思議だよ……」

「ほらほら、アキつてば。そんな事より、ウチヒアンタでやることに決まつたんだから、前に出て議事をやらないと」

お前の仕業だと心の中のみで言つておく。

「なんだか僕はいつもこんな貧乏くじを引かされている気がするよ……」島田に促され、吉井は席を立つて前に出た。

「んじや、あとは任せたぞ。ふあ……」

入れ替わり席に戻る雄二。席に戻つた途端熟睡しそうな感じだ。つてか寝る。

「ウチは議事をやるから、アキは板書をお願いね

「ん、了解」

「それじゃ、ちやつちやと決めるわよ。クラスの出し物でやりたいものがあれば挙手してもらえる?」

島田が告げると何人が挙手する。

「はい、土屋」

「……(スクツ)」

土屋が名前(つてか異名)を呼ばれて立ち上がつた。

「……写真館」

「……土屋の言つ写真館で、かなり危険な予感がするんだけど」

島田が思いつ切り嫌そうな顔をする。

女子からすればムツツリーの撮る写真は嫌であろうが、男子からすると宝の山らしい。

推定の助動詞を使ったのは俺はまだ買っていないからだ。一応前に見せてもらつたがギリギリのエロが見え隠れしていた。

「アキ、一応候補だから黒板に書いてもらえる?」

「あいよー」

吉井の生返事。

【候補? 写真館『秘密の覗き部屋』】

あの馬鹿にしては珍しく要点を捕らえていたが、いかんせん逮捕されるであろう。

「次。……はい、横溝」

「メイド喫茶と言いたいけど、流石に使い古されていると思つので、ここは斬新にウェディング喫茶を提案します。」

「ウェディング喫茶? それってどういうの?」

「別に普通の喫茶店だけど、ウェイトレスがウェディングドレスを着てるんだ」

まあ、衣装がウェディングドレスなだけだ。

「斬新ではあるな。」

「憧れる女子も多そうだ。」

「でも、ウェディングドレスって動きにくくないか?」

「調達するのも大変そうだぞ?」

「それに、男は嫌がらないか? 人生の墓場、とか言つぐらいだしな。」

「そんな意見に、クラスの中が少しづわめぐ。」

「ほら、アキ。今の意見もボードに書いて」

「あ、うん」

島田に促されて、吉井がホワイトボードに横溝の提案を書く。

【候補? ウェディング喫茶『人生の墓場』】

「こいつは学園祭の出し物だと考えているのだろうが? 多分、違うな。」

「さて、他に意見は……須川」

「俺は中華喫茶を提案する」

須川が立ち上がる。

「中華喫茶？ チャイナドレスでも着せよつて言うの？」

「いや、違う。俺の提案する中華喫茶は本格的なウーロン茶と簡単な飲茶を出す店だ。そうやって一口モノ的な格好をして稼ごうってワケじゃない。そもそも、食の起源は中国にあるという言葉があることからもわかるように、こと『食べる』という文化に対しても中国ほど奥の深いジャンルはない。近年、ヨーロピアン文化による中華料理の淘汰が世間では見られるが、本来食というのは……」  
料理好きな俺としてはなかなか興味深い内容だった。確かに世界三大料理の一角にはなっているが、須川は特に中華料理に強いこだわりでもあるという事がありありと伝わる。

「アキ、それじゃ、須川の意見もボードに書いてくれる？」

「あ、うん」

吉井は困って手を止めた。恐らく須川の言つた事が殆どわからなかつたようだ。

「どうしたの？ 早く書いてよ」

「りょ、了解」

島田に急かされてやつと書き始める。

【候補？ 中華喫茶『ヨーロピアン』】

センセーションすぎる名前だ。

そこへ、教室の扉が開き、Mr・西村が入ってくる。はたしてこれを見せていいものか疑問に思う。

「清涼祭の出し物は決まったか？」

「今のところ、候補はこの三つです」

島田が言つと、鉄人はホワイトボードを見る。

【候補？ 写真館『秘密の覗き部屋』】

【候補？ ウェディング喫茶『人生の墓場』】

## 【候補？中華喫茶『ヨーロピアン』】

「……補習の時間を倍にしたほうが良いかもしれんな  
やつぱり俺達がバカだと思われてるが、残念ながら正論だ。」

「せ、先生！それは違うんです！」

「そうです！それは吉井が勝手に書いたんです！」

「僕らがバカなわけじゃありません！」

クラスの連中が吉井をバカ扱いして弁明しようとする。

「馬鹿者！みつともない言い訳をするな！」

Mr.西村の一喝で、背筋が伸びる一同。

やはり、クラスメイトを売つてその場を逃れようとするのが気に入らないのであるつか？

「先生はバカな吉井を選んだ事自体が頭の悪い行動だと言つているんだ！」

教師にあるまじき発言だ、が『こじらせクラスだ』と言わなければ何とも言えない。

「全くお前達は……少しほは真面目にやつたらどうだ。稼ぎを出して楽しく打ち上げとか、そう言つた気持ちすらないのか？」

溜息まじりの鉄人の台詞。それを聞いて、クラスの連中の目が急に輝きだした。

「そうか、その手があつたか！」

「み、皆さんつ！頑張りましょー！」

これは姫路の声だ。姫路は立ち上がって胸の前で手を握り、（『ギュッとした』のポーズ）

やる気を見せていく。姫路がこんな風に率先するとは思わなかつた。

「出しどうする？利潤の多い喫茶店が良いんじゃないかな？」

「いや、初期投資の少ない写真館の方が……」

「けど、それだと運営委員会の見回りで営業停止処分を受ける可能性もあるぞ。」

「中華喫茶ならはずはないだろう。」

「それだと目新しさに欠けるな。どちらかといえれば西洋的なこの教室だと、厳しくないか？」

「ウェディング喫茶はどうだ？」

「初期投資が高すぎる。たった一日の清涼祭じや儲けは出ないんじやないか。」

「リスクが高いからこそリターンも大きいはずだ！」

Fクラスはやる気になつた。しかし、意見がまとまりそうに無かつた。

「はいはい！ ちょっと静かにして！」

島田が手を叩いて注意する。効果はないようだ。さらに次から次へと意見が出はじめた。

「お化け屋敷なんかの方が受けると思ひ。」

「簡単なカジノを作ろう。」

「焼きとうもろこしを作ろう。」

意見がてんでバラバラになつていぐ。試合戦争のときは比べ物にならないほどだ。こんな連中をまとめたいた雄一のクラス代表としての手腕はやはり相当なもの、いや相当以上だと思い知らされる。ホワイトボードの前では島田と吉井がなにか話しているようだが、クラスの連中ががやがやしているせいによく聞こえない。

「もう少しひとにくく静かにして！ 決まりそうにないから、店はさつきの挙がつた候補から選ぶからね！」

業を煮やした島田が無理矢理話をまとめた。妥当な判断だろう。「ほらっ！ ブーブー言わないのー！」の三つの中から一つだけ選んで手を挙げる事いいわね！」

しまだのにらみつけるこうげき！

Fクラスのぼうぎよがさがつた！

強引に決を採りにかかる島田。おそらく雄一も島田のこうじつけを期待して推薦したのだろう。

「それじゃ、写真館に賛成の人！ はい、次はウェディング喫茶！ 最

後、中華喫茶！」

島田の声が教室に響くが、それでも喧騒は収まらない。

騒然としている中、島田が挙げられた手の本数をカウントし始めた。

その結果……

「Fクラスの出し物は中華喫茶にします！全員、協力するよ！」  
接戦で中華喫茶が勝利となつた。

「それなら、お茶と飲茶は俺が引き受けれるよ」

提案者の須川が立ち上がる。むろんの事だ。

「…………（スクツ）」

そして何故か土屋も立ち上がるのだが、俺が聞いてみる。

「お前、中華料理とかできんのか？」

「…………紳士の嗜み」

中華料理が紳士の嗜み？よくわからないが、土屋のことだから俺にはよくわからない下心が絡んだ理由だろう。

そこへ秀吉が声をかけてくる。

「安心せい洋太郎、ムツツリーーは手先が器用で物覚えも早いのじやから安心して任せられるじゃうつ」

「秀吉が言うなら俺も安心できるが……」

と言いかけて俺はさつき秀吉が明久を副実行委員に推薦し、その結果。鉄人に補習を増やされそうになつた事を思い出し少し不安になつてしまつた。だつたら……

「すまない、須川。俺も料理班に入ってくれ。」

「え、有明。あんた試召戦争研究会の仕事があるんじや。」

島田が疑問をいでした。

「レポートだから、テキトーに家帰つてやるよ。まあ、料理と聞いちゃ黙つてられないからね。須川、これで問題ないか？」

そういうつて俺は銀色の免許証を見せた。

「え、有明それ！」『うおおー、これは学食一級厨師の免状。俺だつて三級だぞ。』…………有明、それって何なの？

「うーん、何て言つたらいいかわからんが……とりあえず、島田こ

の学園の学食が評判なのは知ってるか？」

「ええ、ウチもたまに学食に行くけどいつも人がいっぱいね。それにどれを食べてもおいしかったわ。」

「ああ、あそこにいる人達はみんなこんな感じの免状持ってるんだよ。」

「で、で有明君つ有明君つてどれくらいのランクなの？」

食べ物の話になつたからか吉井が割り込んできた。

「ああ、ちょっと待つて。今、表を出してやる。」

俺はパソコンを用いて表をダウンロードしてスクリーンにヒュンした。

#### 文翔学園食堂厨師

特級：（要求事項 - 料理と栄養に関する膨大な知識を有し、あらゆる調理を素早くかつ美味しく作ること）一級厨師の中から、筆記・実技・互選とで決定され、食材の注文を始め、全ての食堂業務の監修を行える。

一級：（要求事項 - 料理に関する膨大な知識を有し、あらゆる料理を美味しく作ること）筆記・実技試験で決定され、レシピ考案を始め、料理に関する全ての業務を行える。

二級：（要求事項 - 料理に関するあらゆる知識を有し、料理を美味しく作ること）筆記・実技試験で決定され、調理に関する全ての業務を行える。更に細かく和・洋・中に別れる。

三級：（要求事項 - 料理に関する知識を有すること）筆記試験で決定され、二級以上の同伴の下、味に関する業務を行える。

「…………」

悲しいかな、理解力を投げ捨てているFクラスでは沈黙以外の言葉が出ていない。

「とりあえず凄いっていうことはよくわかったわ。じゃあまずは厨房班とホール班に分かれてもらうからね。厨房班は須川と土屋のと

「ころ、ホール班はアキのところに集まつて！」

そして何故か吉井をホール班のトップにする島田。

「それじゃ、私は厨房班に……」

「ダメだ姫路さん！ キミはホール班じやないと！」

さも当然とばかりに厨房班に入ろうとした姫路を明久が止めた。

「明久、グッジョブじや」

「命に関わる判断は早いじやねえか」

「…………！（コクコク）」

その殺傷能力を知っている俺、秀吉、土屋からのアイコンタクト（シリアルキラー）覚えさせられた）。最大の犠牲者であつた雄一は寝ている為か気づかない……はずだが、小刻みに震えていた。まさか夢の中でも姫路の料理を食べてるのか？

「え？ 吉井君、どうして私はホール班じやないとダメなんですか？」

無自覚な台所の死神シリアルキラーが首を傾げる。俺は本当のことを話したが吉井達は姫路に妙に気を使つてゐるため根本的な解決には至つていない。「あ、えーと、ほら、姫路さんは可愛いから、ホールでお客さんに接したほうがお店として利益が痛あつ！ み、美波！ 僕の背中はサンドバッケージじゃないよ！？」

「か、可愛いだなんて……吉井君がそう言つなら、ホールでも頑張りますねっ」

ホールオンリーで頑張つてくれ。

「アキ。ウチは厨房にしようかな？」

「うん。適任だと思つ」

「こいつ死亡フラグだ。

「それなら、ワシも厨房にしようつかの？」

「秀吉、何を馬鹿なことを言つてるのさ。そんなに可愛いんだから、もちろんホールに決まってみぎやああつ！ み、美波様！ 折れます！ 腰骨が！ 命に関わる大事な骨が！」

「ウチもホールにするわ」

「そ、そうですね……それが、いいと、思います……」

死亡フラグ回収。

### 第1-3問（後書き）

大変遅くなつて申し訳ありません。

厨師制度は完全にオリジナルです。ご容赦下さい。

これからもちまちま投稿させていただきます。

## 第14問（前書き）

バカテスト・地理

問題：バルト三國と呼ばれる国を全て挙げなさい。

姫路瑞希の答え

「リトアニア・ラトビア・エストニア」

教師のコメント

そのとおりです。

有明洋太郎の答え

「東フランク王国・西フランク王国・ロタール王国」

教師のコメント

世界史脳から抜け出して下さい。

土屋康太の答え

「アジア、ヨーロッパ、浦安」

教師のコメント

土屋君にとっての国の定義が気になります。

吉井明久の答え

「香川、徳島、愛媛、高地」

教師のコメント

正解不正解の前に、数があつていなることに違和感を覚えましょう。

## 第14問

「さてと、レポート書きに行くか」

帰りのホームルームも終わり、学校でやれなかつたレポート作成に勤しもうと鞄をとつた矢先、

「だつてアンタと坂本つて、愛し合つてるんでしょ？」

「もう僕お嫁にいけないっ！」

吉井と島田の訳が分からぬ会話が聞こえてきた。

1、なんで吉井と坂本が愛し合つてるという設定なのか  
2、仮にそうでも吉井は男なので嫁じゃなくて婿だ  
流石Fクラス。些細な会話でツツコミポイントが2つだ。  
「誰が雄一なんかと！だつたら僕は断然秀吉の方がいいよー」  
いいのかよ……相変わらず例のあのバカの思考は俺の常識の範疇を越えている。

「……あ、明久？」

偶然、二人の会話を聞いていた秀吉の動きが止まる。

「そ、その、お主の気持ちは嬉しいが、そんなことを言われても、ワシらには色々と障害があると思うのじや。その、ホラ。年の差とか……」

残念ながらその問題は解消されていく。

つてゆうか、このクラスではこんなにいろいろ突っ込んでられない。ツツ「//世人なら、収穫祭どころか、乱獲したつてまだ溢れるだろ？」

「それじゃ、坂本は動いてくれないってこと？」

「え？ あ、うん。そういうことになるかな」

島田が話を変え、吉井がそれに答える。雄一がどうしたんだ？

「なんとかできないの？」のままじや喫茶店が失敗に終わるような……」

不思議な事を言つ島田。

「てか、さつきから何の話なんだよ、明久と雄一が愛し合つてるとか、喫茶店が失敗するとか、脈絡が全然繋がつてねえだろ」秀吉はさつきから顔を赤くしていいるため、仕方なしに俺が一人に聞く。

「深刻つて程じゃないんだけど……」

「アキ、そうじやないの。本当に深刻なのよ……」

「え? どういうこと?」

まさか、当事者同士でも話題が繋がつてないとは。

深刻とは……さつきの俺との会話とも関わるのだろうか?

「本人には誰にも言わないで欲しこつて言われたんだけど、事情が事情だし……けど、一応秘密の話だからね?」

「う、うん。わかった」

「了解した。」

島田のいつも以上に真剣な顔に、明久が少し気圧されてるようだった。

「実は瑞希なんだけ?」

「姫路さん? 姫路さんがどうしたの?」

「早えよ。最後まで聞け」

姫路のこととなると、急に食いつく吉井を窘める。

「あの子、転校するかもしれないの」

「ほえ?」

島田の言葉に明久が変な声を出す。（気持ち悪い）

「島田。一体どういうことだ?……おい? 明久? なに固まつてんだお前?」

「む。マズイ。明久が処理落ちしかけておるぞ。」

「このバカ! 不測の事態に弱いんだから!」

「処理落ちつて……容量のないコンピューターじゃあるまいし……」

「明久、目を覚ますのじや!」

秀吉が明久の肩を揺すつて起こさうとする。（起こすといふ動詞が

適切かは分からぬが。」

「秀吉……、モヒカンになつた僕でも、好きになつてくれるかい……？」

「どういう処理をしたら、瑞希の転校からいつこう反応が得られるのかしら？」

「ある意味、稀有な才能かもしれんのう」

「いや、少なくとも才能じやあねえな。」

俺たち三人は思い思いの感想を口にする。

「美波！姫路さんが転校つてどうこうこと？」

明久が正気に戻り島田に詰め寄る。

「どうもこつも、そのままの意味。このままだと瑞希は転校しちゃうかもしれないの」

「このまま？」

島田の言い回しは妙だ。この言い方だと転校はまだ確定したわけではない。

「島田よ。その姫路の転校と、さつきの話が全然繋がらんのじやが」秀吉が小首を傾げる。俺は島田に自分が今思つている（それ以外にはあまりないであろう）事を口にしてみる。

「島田。姫路の転校の理由つて、Fクラスが原因なのか？」

「そうなのよ。正確には『Fクラスの環境<sup>×××とか</sup>』が問題なんだけど」俺が言つたFクラスが原因というのは環境以外の問題点の事だが、確証がないため口には出さない事にする。そこに明久が口を開く。「つてコトは、転校の理由は両親の仕事の都合とかじやなくて……」「うん、このクラスの純粹な学力よ。」

「まあな、確かに設備に関しては、ある程度の期間は雄一や俺の計略で最高の設備にはしたがな、学力は上がつてゐわけないからな。」  
「悔しいけど正解よ。瑞希も抵抗して『召喚大会で優勝して両親にFクラスを見直してもらおう』とか考えているみたいなんだけど、どうにかしないと」

Fクラス＝バカの集まりだからというのが転校を勧められる一因だ

から姫路の行動も間違つてはいる。

ただ、振り分け試験を姫路の病氣で休んだのに「クラスを受け入れないのは両親の問題かもしだいが。

「……アキはその……瑞希が転校したりとか嫌だよね……？」

島田が探るような目で吉井を見ている。吉井にとつて姫路は特別な相手だということを島田もある程度は気づいてるようだ。故に、明久を意識している節（暴力的手段だが）のある島田にとつては気になることのようだつた。

「もちろん嫌に決まつてゐ！姫路さん」に限らず、それが美波や秀吉や洋太郎であつても！」

いつのまにか名前で呼ばれている。

「そつか……うん、アンタはそつだよね！」

島田が嬉しそうに頷く。今、名前を挙げた四人以外でも土屋や雄一に対しても同じように思つてゐるのだろう。……多分、恐らく、あつと。

「やつこり」となり、やつぱりとにかくして雄一を焚き付ける必要があるな」

「そうじやな。ワシもクラスメイトの転校と聞いては黙つておれん」「まあ、親の心子知らずつてよく言つけど子の心親知らずつてのもあるんだらうな。」

「それじゃ、まずは雄一に連絡を取らないとね」

そう言つと吉井は、雄一に携帯をかける。呼び出し音が受信器から聞こえる。

「もしもし、あ、雄一。ちよつと話が」

吉井が雄一に話をしようとする。

「え？ 雄一。今何をしてるの？」

「が、様子がおかしい。

「雄一！ もしもし！ もしもーしー！」

話を伝える前に切られたようだ……

「坂本はなんて言つてた？」

「えつと『見つかつちまつた』とか『鞄を頼む』とか言つてた」

「……なにそれ？」

島田がクズを見るような目で明久を睨む。流石にこれは吉井のせいではないと思うが…。

「大方、霧島翔子から逃げ回つているのじやろ? アレはああ見て異性には滅法弱いからのう」

秀吉が腕を組んでうんうんと頷いている。確かにAクラス戦の次日もあいつは朝から追いかけてた。

「はあ、そうすると、坂本と連絡取るのは難しいわね」

島田が大きく息を吐く。

「いや、これはチャンスだ」

明久が突然明るい声を出す。

「え? どういうこと?」

「雄一を喫茶店に引つ張り出すには丁度いい状況なんだよ。うん。ちょっと三人とも聞いてくれるかな?」

「それはいいけど……坂本の居場所はわかっているの?」

「大丈夫。相手の考えが読めるのは、なにも雄一だけじゃない」

「何か考えがあるようじやな」

「珍しくお前が頼もしく見えるな。」

「まあね」

俺達は吉井に連れられて教室をあとにした。

吉井が雄一がいそうな場所とやらに行つてからしばらく時間が過ぎたところで島田の携帯が鳴り出す。

「誰からじゃ?」

「アキの携帯からよ」

「つてことは雄一が見つかつたってことか?」

島田が携帯に出る。

「もしもし？坂本？」

「島田か。一体何の真似だ？」

「ちょっと待つて。今替わるから」

秀吉が島田の携帯を取る。

「……雄一。今どこ？」

これは秀吉による霧島の声真似だ。ブン（電話が切られた音）  
「とりあえず、これで雄一を呼び出せるってわけなのか？まあ何も  
やつてない俺が言うのも難だけど」

「でも、アキも凄いわね。本当に坂本の居場所がわかつちゃうんだ  
もん、一体どうやって……」

「全く、相変わらずFクラスは馬鹿なことしかやらないわね」

島田が言いかけたところで後ろから声がする。

「姉上！」

秀吉が声を擧げる。後ろにいたのは秀吉の双子の姉の木下優子だった。

「ああ、誰かと思ったらAクラスを豚小屋に押し込んだ張本人様では  
は有りませんか。」

「なんですって……だいたいあんたがあんな卑怯な真似をするから

……

「卑怯・汚い、敗者の戯言。これは戦争だ。どんな方法であれ勝つ  
たやつが正義なんだよ。」

「洋太郎よ、これ以上姉上を挑発しないでくれないか？で、姉上よ。  
今のやり取りの何処が馬鹿なのじゃ？」

売り言葉に買い言葉となつたこの状況を秀吉が止めようとした。

「別にあなたたちの今のやり取りなんて関係ないのよ。」

「だったら一体何が馬鹿なのよ！」

島田が少しイラついたような表情で木下に詰問する。

「さつき、体育館裏の女子更衣室でFクラスの坂本君と吉井君が隠  
れてたのよ。」

「…………」「」

「どうやら、雄一は霧島から逃れる為に女子更衣室に隠れてそこに吉井が探しに来たらしい。女子更衣室に隠れる雄一も雄一だが、なぜ明久は雄一が女子更衣室に隠れてるのがわかつたのかが謎だ。

まあ、解明したところで何の足しにもならない（むしろ、無駄な時間を使ってマイナスか。）

「ま、あいつらの考える事は俺らにもよくわからんからな、俺らに文句言われてもどうしようもねえな」

俺は軽く木下姉の相手をする。

「あなた、この前の試召戦争でAクラスに勝つたからっていい気になってるんじゃないの？」

「どうやら挑発と受け取つたらしく、木下姉がそんなことを言い出す。「とんでもない。むしろあそこまで真面目腐つたような奴らが相手だと楽勝にも程がある。頭脳戦ならまだあのBクラス代表『卑怯者』のほうがマシだったよ。」

あ、それはそうと10時間のテストお疲れ様でした。」

俺は冷笑を込めて答える、この発言は本当の挑発だ。木下は拳を握り締めて俺を睨みつける。

「この前といい今といいFクラスの癖にいい加減にしなさいよ。……試召戦争はゲームじゃないのよ。ろくに勉強しないで起こした時点で充分楽ししようとしてるようなものだわ。」

「この学校に入ったのは貴様だろ。んでルールを受け入れたからにはこんな事態もあつてしかるべきだ。嫌ならさつさと転校するんだな。」

「覚えてらっしゃい。停止期間が終わつたら直ぐにでもFクラス相手に試召戦争を起こしてFクラスに相応しい設備にしてあげるわ。」

そう捨て台詞を言いながら木下姉は去つていった。

「へつ、おととい来やがれ！いつもいつでも返り討ちにしてやられ

最後の最後まで喧嘩腰で返してやつた。

「なによあれ！嫌な感じ！双子なのにウチらの木下とは大違ひね！」

「まあ、あいつにとつてのFクラスは急げばかりいるくせに権利ばかり主張する自分勝手な集団つてことなんだらう。そのくせ勝っちゃつたからな、自称真面目にやつてきた人にとつちやあ溜まつたもんじやねえだろ。」

未だに怒りを抑えられない島田に自分の所見を語る。

「島田に洋太郎よ、すまぬのう……姉上のせいで不愉快な思いをさせてしまって」

秀吉が申し訳なさそうに俺達に謝る。

「なんでお前が謝るんだよ？このぐらこ返せなきゃ參謀なんてやつてられない。」

「そようよ木下。あなたはウチらの仲間だしいい奴だつてわかつてゐんだから、あんなお姉さんの言ひ事であなたが負い田感じる必要なんてないわよ。」

「洋太郎に島田……うむ。そういうてもううるとうれしいぞい、お主らとクラスメイトでワシはよかつたのじや。」

秀吉はよみやく笑顔になり、そこに吉井と雄一もよみやくやつてきた。

「そつか。姫路の転校か……」

俺達は吉井と雄一と合流した後、Fクラスの教室に戻った。

「そうなると、喫茶店の成功だけでは不十分だな」

「つてゆうか、喫茶店は関係なくねえか？」

「え？ どうして？」

明久が疑問を投げかける。

「姫路に転校を勧めた要因は恐らく三つ」

「そいいい、雄一は指を三本立てて見せた。

「まず一つ目。Fクラスの綿のない座布団とちやぶ台といつ貧相な設備。快適な学習環境ではない、という面だな。」

「そういうながら指を一本引っ込める。」

「一いつ田は、老朽化した教室。これは健康に害のある学習環境という面だ」

「一つ田は道具で一いつ田は教室 자체ってこと?」

「確かに。でも、まあこの2つの問題については解消されたからな。」

「俺が代弁する。」

「そして、三つ田。レベルの低いクラスメイト。つまり姫路の成長を促すことのできない教育環境だ。そしてこれが唯一にして最大の問題だ。」

雄一の言うとおり、能力を伸ばすために実力の近いもの同士を競わせる事はベタベタだ。しかしこのFクラスにはそんな相手はない。クラス内で姫路の次に成績の高い俺でも競争相手になれるかどうか不確定だ。歴史は姫路の段階を圧倒的に越えているし、その他では手も足もない。まして、坂本達ではなあさうだ。

「参ったね。随分と問題だらけだ」

「やうじやな。一いつ田や一いつ田ならともかく、二いつ田は難しいのう」

吉井と秀吉が不安そうに言つ。

「それでもないさ。三つ田の方は既に姫路と島田で対策を練つているんだろう?」

雄一が島田に視線を送る。確かに、今日のロングホームルームで姫路は『お父さんの鼻をあかす』と言つていた。Fクラスにも学年トップと渡り合える生徒がいるという証明になるだろう。

「この前、瑞希に頼まれちゃつたからね。『どうしても転校しないから協力して下さい』って。召喚大会なんて見せ物にされるだけみたいで嫌だけど、あそこまで必死に頼めたら、ね?」

「翔子が参加するようなら優勝は難しいが、アイツはこういった行事には無関心だしな。姫路と島田の優勝は充分ありえるだろう。」

「確かに姫路の本来の学力は学年次席だし、島田も数学ならBクラス並。やってやれることでもないな。」

俺も雄一の意見に賛成する。霧島が参加するとなると恐らくパートナーもAクラスの生徒だろうし、そうなると姫路でもパートナーが島田では勝ち田は薄くなる。

「本当なら姫路抜きでFクラスの生徒が優勝するのが望ましいけどな」

雄一が俺のほうを見てそう言つ。

「残念ながら俺は召喚大会の解説をやることになつてるからな。それに姫路が島田を選んだんなら島田が出たほうがいいだろ。」

「姫路と島田が優勝したら、喫茶店の宣伝にもなるし」石鳥じやな

「放送します。2年Fクラスの有明洋太郎君。至急学園長室までお越しください。繰り返します……」

「あれ、有明？あんた学園長に呼ばれているみたいだけどなにかつたの？」

いきなり俺が呼び出されたので島田が疑問を示す。

「いや、あのクソヤロー何かと雑用があると俺を呼ぶんだよ。さてさて今日は何が起こるのかな？」

「ねえねえ、洋太郎君。それって観察処分者みたいなのが?だったら仲間だね。」

吉井が期待を込めた目で こっちをみている。

「あほか、そんな肉体労働なら貴様にやらせるわ。馬鹿には出来ない仕事をさせるんだよ。すまない、雄一。何かあるといけないからしばらく待機してくれ。」

「了解。」

俺は学園長室へと足を運んだ。

第1-4問（後書き）

感想などなど待っています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1978s/>

---

バカと奇人と召喚獣

2011年10月8日23時24分発行